

# 笠場馬寺嚴陵

— 福岡県宗像市陵嚴寺所在遺跡の発掘調査報告 —

宗像市文化財調査報告書 第60集

2008

宗像市教育委員会







笠場馬寺嚴陵

宗像市文化財調査報告書 第60集



2008

宗像市教育委員会





第Ⅰ次遺構面東半全景



SB 1 完掘







SE 1 遺物出土状態



SK 4 出土遺物



## 序 文

宗像市は、白砂青松の美しい海岸線や遠賀郡との境をなす四塚の山々などの自然に恵まれたところです。また、昔から中国大陆や朝鮮半島などの文化をいち早くとりいれて栄えた地域として長い歴史をもっています。

その中で古代から海を舞台に活躍した「胸肩一族」の末裔にあたる「宗像大宮司家」は、中国大陆や朝鮮半島における対外交渉により、この地域での地方領主としての地位を確立していきます。そして中世から戦国時代にかけて、この地域の利権を求めた周辺地域領主である少貳氏や大友氏などとの勢力争いが幾度となく繰り広げられていました。

本書は、陵巖寺馬場笠遺跡2次調査の内容を収録したものです。調査地点は、「第八十代宗像大宮司氏貞」が永禄三（1560）年に本城を構えた「蔦ヶ岳城」のあった城山の南西麓にあります。調査の結果、その時代の建物の遺構や遺物が確認され、当時の様子を知る上で貴重な成果を挙げることができました。

この成果は、本市の歴史を知る上で貴重な資料となるとともに、市民の方々へ文化財保護に対するご理解を深めていただく一助となることを願いたします。

平成20年3月31日

宗像市教育委員会

教 育 長   城 月 カ ヨ 子

## 例 言

1. 本書は平成18年度に国庫補助事業を受け実施した、陵巖寺馬場笠遺跡2次調査（宗像市陵巖寺706－6番地ほか）の報告書である。
2. 発掘調査は宗像市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 陵巖寺馬場笠遺跡の福岡県文化財番号は、330777である。
4. 本報告書の遺物番号は挿図や遺構番号に関わらず、すべて通し番号である。
5. 遺構の名称は次のように記号化した。  
SA：柵列    SB：掘立柱建物    SK：土坑    SD：溝    SX：不明遺構
6. 基準点測量は（有）三田測量に委託した。平成14年国土交通省告示第9号の規定による第Ⅱ座標系を用いている。方位はすべて磁北である。
7. 現地での発掘作業は地元有志の協力を得た。
8. 遺構実測図は坂本雄介、岡本格、濱田洵、川口陽子、許斐麻衣が行った。
9. 遺物の実測は坂本、岡本、長谷川豪、河野祐一郎、浅倉弥生が行った。
10. 遺構および遺物の写真撮影は坂本が行ったが、全景写真は（有）空中写真企画に委託したほか、スカイマスターを使用し撮影した。
11. 遺構、遺物の製図は中原美知子が、遺物の整理は西村広子、田代貞子、田崎結子、東和子、濱田広美、田島圭伊子、浅倉が行った。
12. 遺物の計測値、所見の詳細は、表を参照されたい。
13. 本書の執筆及び編集は坂本が行った。
14. 本調査において出土した遺物および実測図、写真等の資料は、宗像市教育委員会（市民活動推進課）で保管している。

## 本文目次

第1章 序 説 .....	1
1. 経過 .....	1
2. 組織と構成 .....	1
3. 位置と環境 .....	2
第2章 調査の記録 .....	5
1. 第Ⅰ次遺構面の調査 .....	5
2. 第Ⅱ次遺構面の調査 .....	13
第3章 ま と め .....	23

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡図 (S=1/2,500) .....	2
第2図 第Ⅰ次遺構面遺構全体図 (S=1/150) .....	3
第3図 第Ⅱ次遺構面遺構全体図 (S=1/150) .....	4
第4図 SA1・SB1～3出土遺物実測図 (S=1/3) .....	5
第5図 SB1-1実測図 (S=1/60) .....	6
第6図 SB1-2実測図 (S=1/60) .....	7
第7図 SB2・SA1実測図 (S=1/60) .....	8
第8図 SK1～5・10実測図 (S=1/40) .....	10
第9図 SK3・4出土遺物実測図 (S=1/2・1/3) .....	11
第10図 SK4出土遺物実測図 (S=1/4) .....	12
第11図 SA2・3実測図 (S=1/40) .....	14
第12図 SB3実測図 (S=1/40) .....	15
第13図 SE1実測図 (S=1/40) .....	16
第14図 SE1出土遺物実測図1 (S=1/3) .....	17
第15図 SE1出土遺物実測図2 (S=1/3) .....	18
第16図 SE1出土遺物実測図3 (S=1/3・1/6) .....	19



第17図	SD・SX出土遺物実測図 (S=1/3) .....	20
第18図	整地層出土遺物実測図 (S=1/1・1/2・1/3) .....	21
第19図	表採出土遺物実測図 (S=1/2・1/3) .....	22

## 表 目 次

表	陵巖寺馬場笠遺跡2次調査出土遺物観察表 .....	25
---	---------------------------	----

## 巻 頭 図 版

図版1	上 第Ⅰ次遺構面東半全景 (空中写真)
	下 SB1完掘
図版2	上 SE1遺物出土状態
	下 SK4出土遺物

## 図 版 目 次

図版1	第Ⅰ次遺構面東半・西半全景
図版2	第Ⅱ次遺構面東半・西半全景
図版3	SB1-1・SB1-2、SA1・SD6、SB2、SK1・2
図版4	SK3・4・10、SA2・3・SB3、SE1
図版5	SA1、SB1~3、SK3・4出土遺物
図版6	SK4、SE1出土遺物
図版7	SE1出土遺物
図版8	SD、SX、整地層出土遺物、表採遺物

# 第1章 序 説

## 1. 経過

### 1) 調査に至る経過

平成17年12月27日、宗像市市民活動推進課に宗像市陵巖寺706-6番地ほかにおける埋蔵文化財の照会があり、該当地は周知の文化財包蔵地「陵巖寺馬場笠遺跡」の範囲内にあり、開発に先立ち文化財の有無を確認する必要があると回答。協議の結果、平成17年12月28日に確認調査を実施した結果、2面にわたる遺構面の存在が確認されたため、申請者より文化財保護法第93条第1項の届出を受け、福岡県教育委員会に進達し、発掘調査との通達をえた。この旨を申請者へ伝達し、協議した結果、次年度に国庫補助を受けて発掘調査を実施するとの結論に達した。

### 2) 調査の経過

平成18年度：平成18年6月1日から同年9月29日にかけて発掘調査を実施した。バックホーによる表土除去、遺構検出、遺構調査、遺構実測図作成、写真撮影を行う。

平成19年度：平成19年6月1日から同年9月29日にかけて報告書作成を実施した。遺物実測図作成、実測図清書、執筆、遺物写真撮影を行う。

#### 文化財保護法にかかる手続き

埋蔵物発見届	平成18年12月7日付18宗市活第875号
埋蔵文化財保管証	平成18年12月7日付18宗市活第879号
発掘調査終了通知	平成18年12月19日付18宗市活第923号

## 2. 組織と構成

### 1) 平成18年度発掘調査組織

総 括	宗像市教育委員会	教育長	川崎雅光
		市民協働部長	藤野英美
		市民活動推進課長	吉田伸広
		文化・スポーツ係長	佐藤久光
庶務・会計		主任技師	岡 崇
調査担当		囑託	坂本雄介

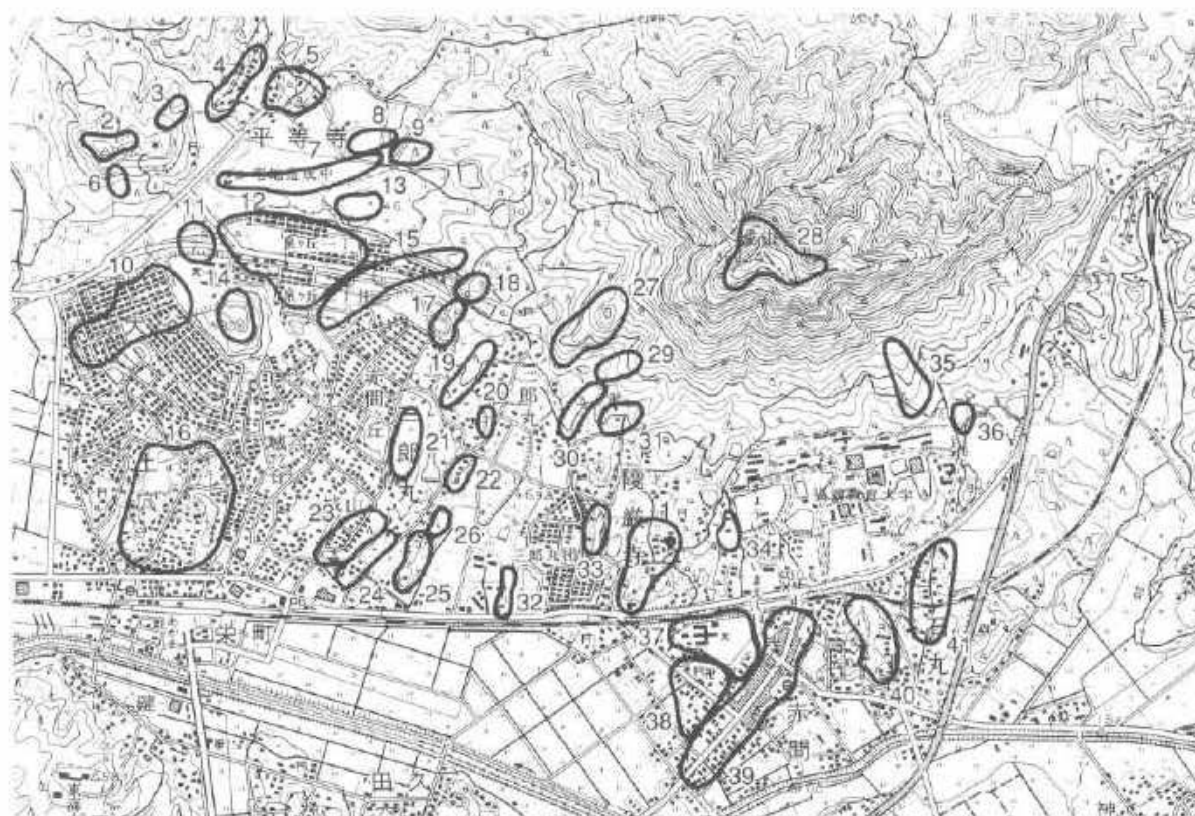
### 2) 平成19年度報告書作成組織

総 括	宗像市教育委員会	教育長	城月カヨ子
		市民協働部長	藤野英美
		市民活動推進課長	井上 均
		文化・スポーツ係長	佐藤久光
庶務・会計		主任主査	安部裕久
		囑託	三上亜子
報告書作成担当		囑託	坂本雄介

### 3. 位置と環境

本調査地は、宗像市の北東部に位置し、遠賀郡岡垣町との境をなす城山（標高369.3 m）の南西麓に形成された河成段丘上に立地し、城山の麓まで入る谷の最奥近くの東斜面にあたる。調査地のすぐ北側には田永宮があり、「石松但馬守尚李」と彫られた石碑がある。また、陵厳寺地区の小字名には「大門」、「馬場」、「狩倉」、「草場」、「茶屋辻」、「寺ノ前」などがみられ、城や城下町を連想させる名が今でも残っている。

近隣における発掘調査例としては、本調査地の北に隣接する陵厳寺馬場笠遺跡1次調査と7世紀後半頃の古墳1基を調査した陵厳寺海老塚遺跡がある。



1 陵厳寺馬場笠遺跡	15 城ヶ谷古墳群	29 陵厳寺狩倉
2 平等寺下ノ山遺跡	16 土穴遺跡	30 三郎丸一ノ構口
3 平等寺下ノ山遺跡	17 三郎丸堂ノ上遺跡	31 陵厳寺寺ノ前
4 平等寺前田遺跡	18 三郎丸堂ノ上B遺跡	32 三郎丸立岸
5 平等寺頭ノ谷	19 三郎丸二ノ構口	33 三郎丸川端
6 平等寺下ノ山	20 三郎丸二ノ構口	34 陵厳寺海老塚
7 平等寺原遺跡	21 三郎丸多々羅	35 陵厳寺宇土遺跡
8 平等寺長浦遺跡	22 三郎丸六田	36 石丸原遺跡
9 平等寺原遺跡	23 三郎丸遺跡群	37 陵厳寺茶屋辻遺跡
10 半田古墳群	24 三郎丸今井城	38 陵厳寺草場遺跡
11 平等寺半田古墳群Ⅱ	25 三郎丸前田遺跡	39 赤間宿跡
12 平等寺向原遺跡	26 三郎丸前田	40 石丸遺跡
13 平等寺瀬戸遺跡	27 茶臼山城跡	41 石丸谷遺跡
14 三郎丸高尾	28 赤馬山古城	

第1図 周辺遺跡図（S=1/2,500）





第2図 第Ⅰ次遺構面遺構全体図 (S = 1/150)



第3図 第Ⅱ次遺構面遺構全体図 (S=1/150)

## 第2章 調査の記録

### 1. 第Ⅰ次遺構面の調査

第Ⅰ次遺構面は、現表土下30～50cmで確認された。調査区東端付近から斜面を埋め立て整地し、平坦面を形成している。第Ⅰ次遺構面の遺構はこの整地層から掘り込まれている。精査の結果、柵列(SA)、掘立柱建物(SB)、土坑(SK)、溝(SD)、不明遺構(SX)を検出した。以下、主要な遺構について述べる。

#### 柵列

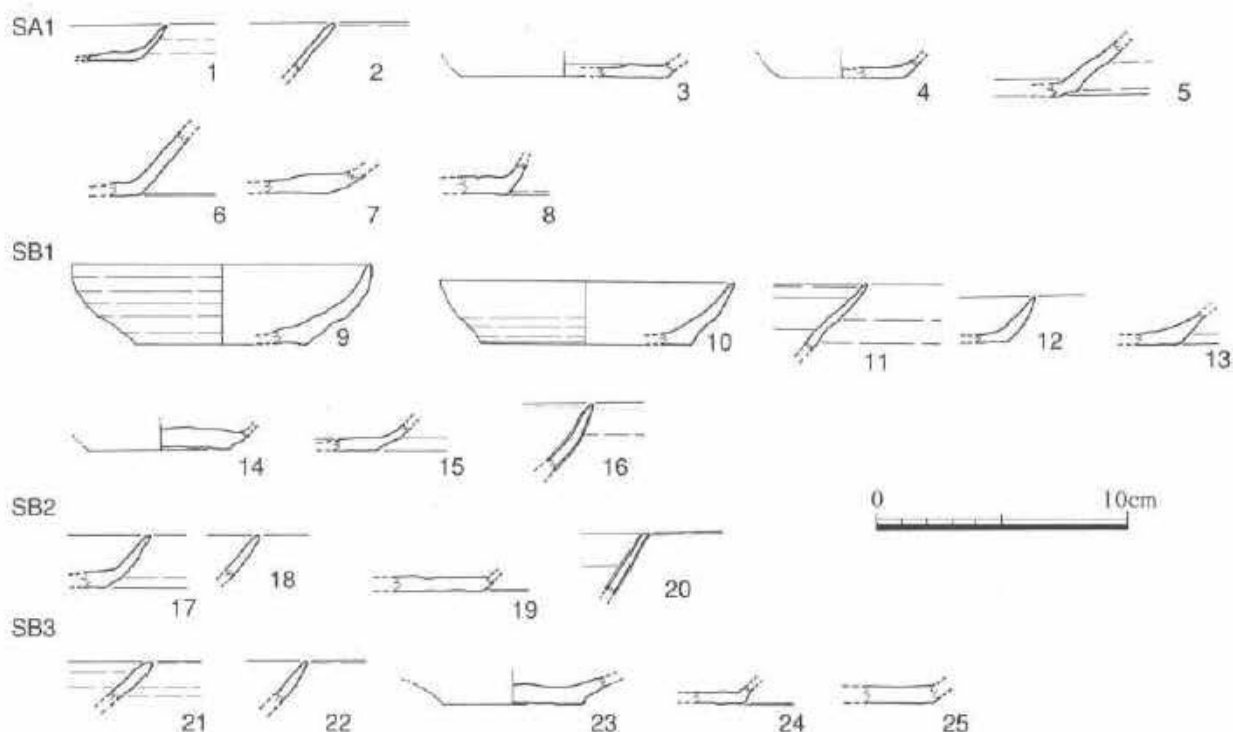
SA1(第7図、図版3)調査区中央西側の調査区外へと延びる4間以上の柵列である。後述するSD6と並列している。軸方位をN-10°-Wにとる。柱穴の平面プランは、径20～30cmのほぼ円形を呈し、深さは最大で50cmを測る。軸長は東から1.1、1.24、1.24mを測る。本遺構と並行するSD6との関連については不明である。

出土遺物(第4図、図版5)埋土中から土師器の小皿、坏が出土した。

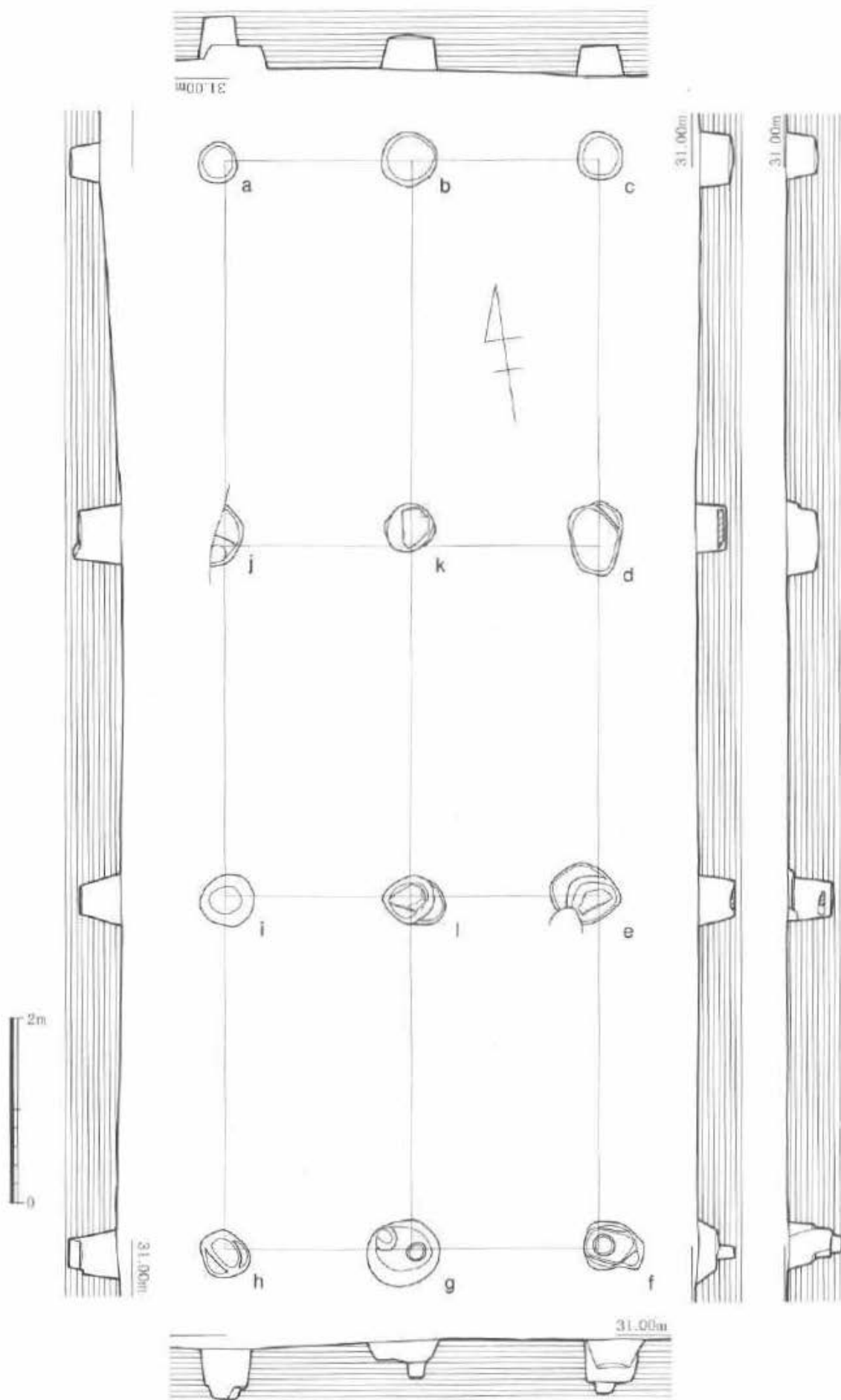
#### 掘立柱建物

SB1-1(第5図、図版3)調査区中央部北に展開する2間×3間の掘立柱建物である。SB1-2と同位置に展開しているが柱間が一定しないことなどから建替えではないかと考えられる。桁行方位をN-8°-Wにとる。各柱穴の平面プランは、径45～70cmの円形や楕円、隅丸方形を呈するものがあり、一定ではない。柱穴の深さは最大で54cmを測る。柱間は短軸側が2.1、1.99m、長軸側が4.1～3.76mを測る。e、k、lには楚板に使用された板状の石が残存する。f、g、h、jには柱の痕跡が確認できる。

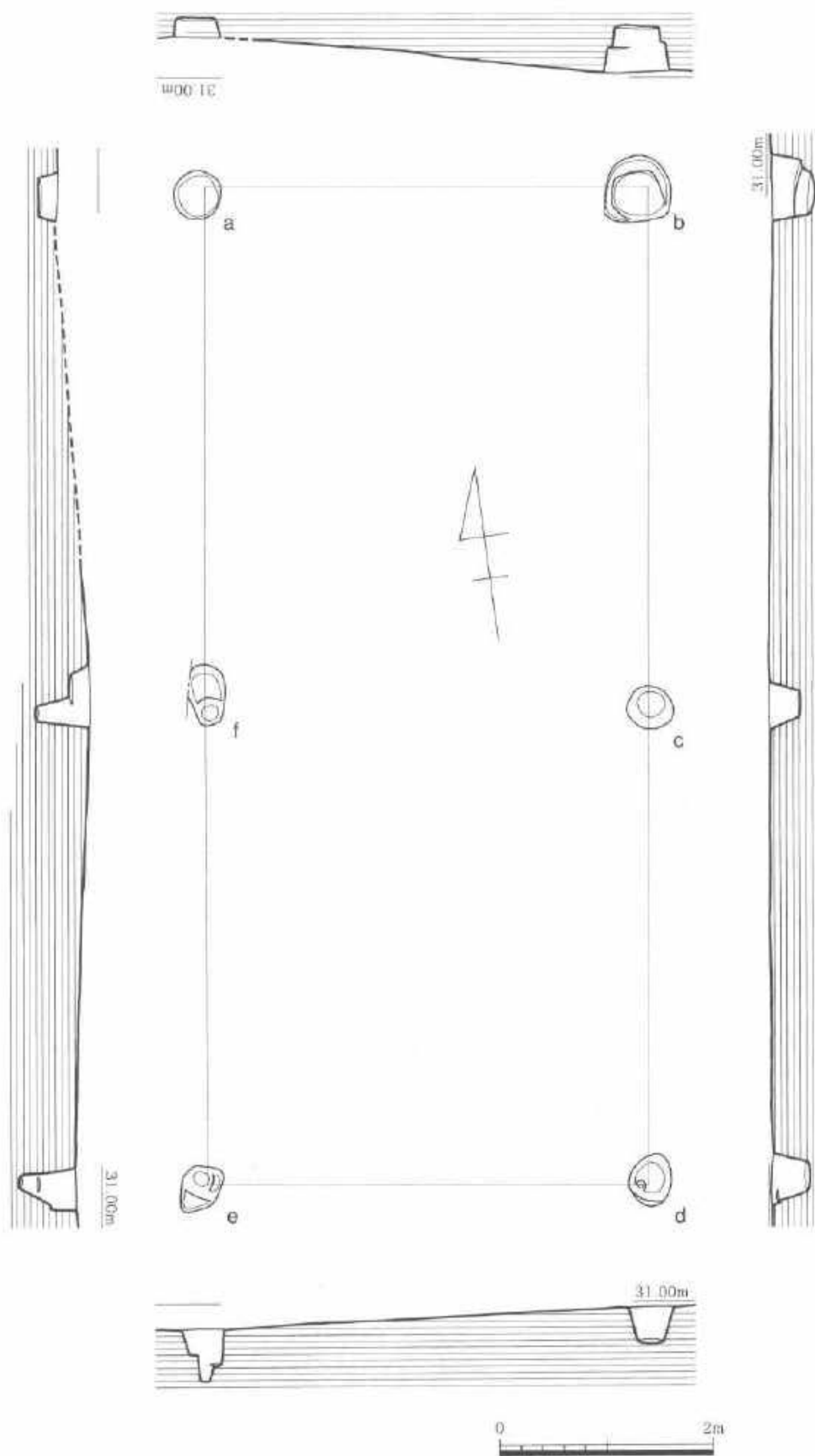
出土遺物(第4図、図版5)土師器の小皿、坏が出土した。



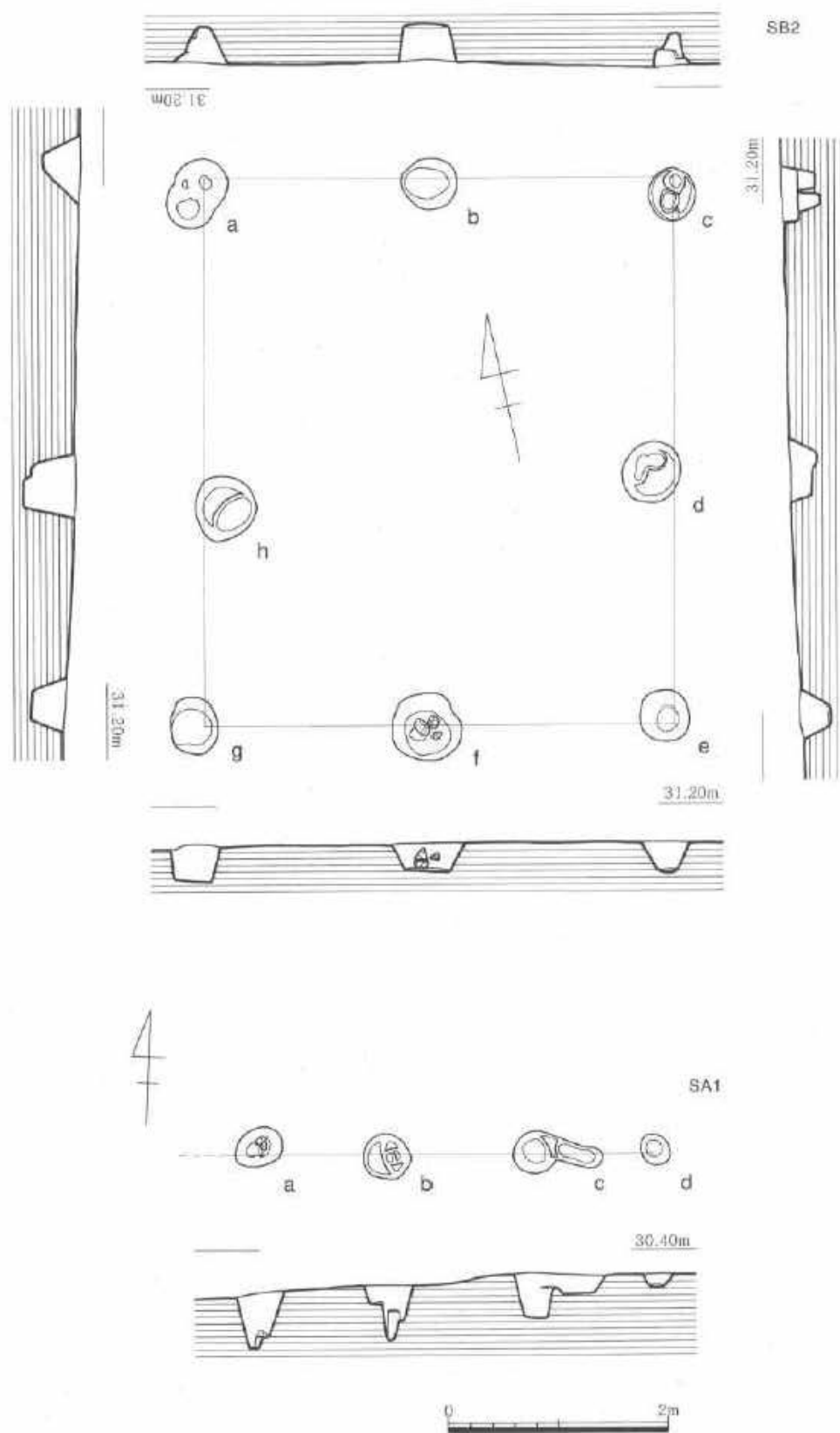
第4図 SA1・SB1～3出土遺物実測図(S=1/3)



第5図 SB1-1実測図 (S=1/60)



第6図 SB 1-2実測図 (S=1/60)



第7図 SB2・SA1実測図 (S=1/60)

S B 1-2 (第6図、図版3) S B 1-1と同位置に展開する1間×2間の掘立柱建物である。桁行方位をN-1°-Wにとる。各柱穴の平面プランは、径45~70cmの円形ややや長い楕円を呈すものがあり、一定ではない。柱穴の深さは最大で51cmを測る。柱間は短軸側が4.1m、長軸側が4.34、4.86mを測る。S B 1-1と違い、楚板に使用された板状の石は確認できなかった。e、fには柱の痕跡が確認できる。S B 1-1との前後関係は不明である。

出土遺物 (第4図、図版5) 土師器の小皿、坏が出土した。

S B 2 (第7図、図版3) S B 1の南東2mに展開する2間×2間の掘立柱建物である。桁行方位をN-13°-Wにとる。各柱穴の平面プランは、径50~65cmの円形や楕円を呈すものがあり、一定ではない。柱穴の深さは最大で50cmを測る。柱間はc d間とh a間が3mで残りはすべて2.2mを測る。fには拳大の礫が4個あり、根石の可能性もある。c d間とh a間は柱間が広く、dとhは柱筋から僅かに内側にずれるため棟持柱などの可能性がある。

出土遺物 (第4図、図版5) 土師器の小皿、坏が出土した。

土壇

S K 1 (第8図、図版3) 調査区中央やや西側に位置し、隅丸長方形を呈す。軸方位をN-5°-Eにとり、規模は床面で短軸69cm、長軸1.3m、深さ23cmを測る。床面には小礫が敷かれているようだったが、整地層の中に礫層が続くため本遺構とは無関係であることが判明した。

出土遺物 土師器が出土したが、小破片で図示できないため割愛した。

S K 2 (第8図、図版3) S K 1の北80cmに位置し、隅丸長方形を呈す。軸方位をN-5°-Eにとり、規模は床面で短軸71cm、長軸1.3m、深さ16cmを測る。本遺構は、S P 115との先後関係において後出するが、床面に現れたS P 115の埋土まで掘削してしまい、遺物が混在してしまった。

出土遺物 土器片が出土したが、小破片で図示できないため割愛した。

S K 3 (第8図、図版4) 調査区中央南側に位置し、長方形を呈す。軸方位をN-5°-Eにとり、2段に掘り込まれ、規模は床面で、上段が長軸1.6m、短軸85cm、深さ17cmを、下段が長軸1.08m、短軸60cm、深さ37cmを測る。下段西半には20~10cmの礫が数個確認され、床面付近からも確認された。北西・南東・南西隅では断面方形の鉄釘が出土した。土層観察で棺の痕跡は明確に確認できなかったが、釘の出土位置や床面付近から確認された礫の状況から推察すると床面に礫を置いて棺台とした木棺墓と考えてさしつかえないだろう。

出土遺物 (第9図、図版5) 鉄釘、土師器の坏が出土した。

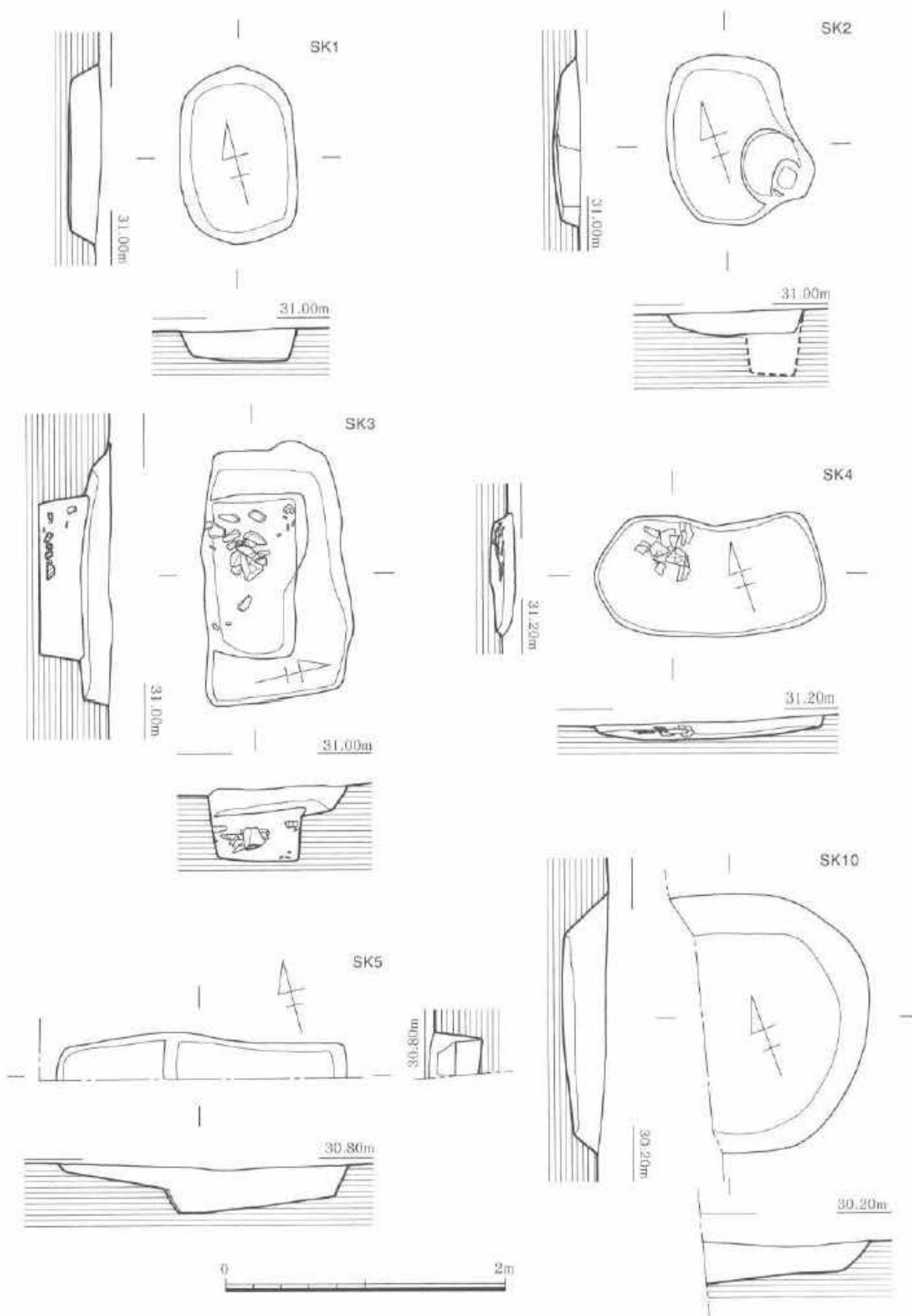
S K 4 (第8図、図版4) 調査区中央東側に位置し、歪な長方形を呈す。規模は床面で長軸1.6m、短軸76cm、深さ15cmを測る。削平を受け、残存状態は非常に悪いが、床面には土器が散らばり、埋土には炭が多く含まれ、埋土を水洗したところ炭化米が混じっていた。

出土遺物 (第9・10図、図版5・6) 瓦質土器すり鉢・火鉢、備前大甕・四耳壺、石臼が出土した。

S K 5 (第8図) S K 3の南に平行に位置し、調査区外へ広がる。確認された範囲では長方形を呈す。階段状に掘り込まれ、規模は床面で上段が長軸72cm、短軸24cm、深さ16cmを測り、下段が長軸1.12m、短軸24cm、深さ32cmを測る。遺物は出土しなかった。

S K 10 (第8図、図版4) 調査区中央西側に位置し、西半は調査区外へ広がる。確認された範囲では半円を呈す。規模は床面で最大1.45m、深さ28cmを測る。

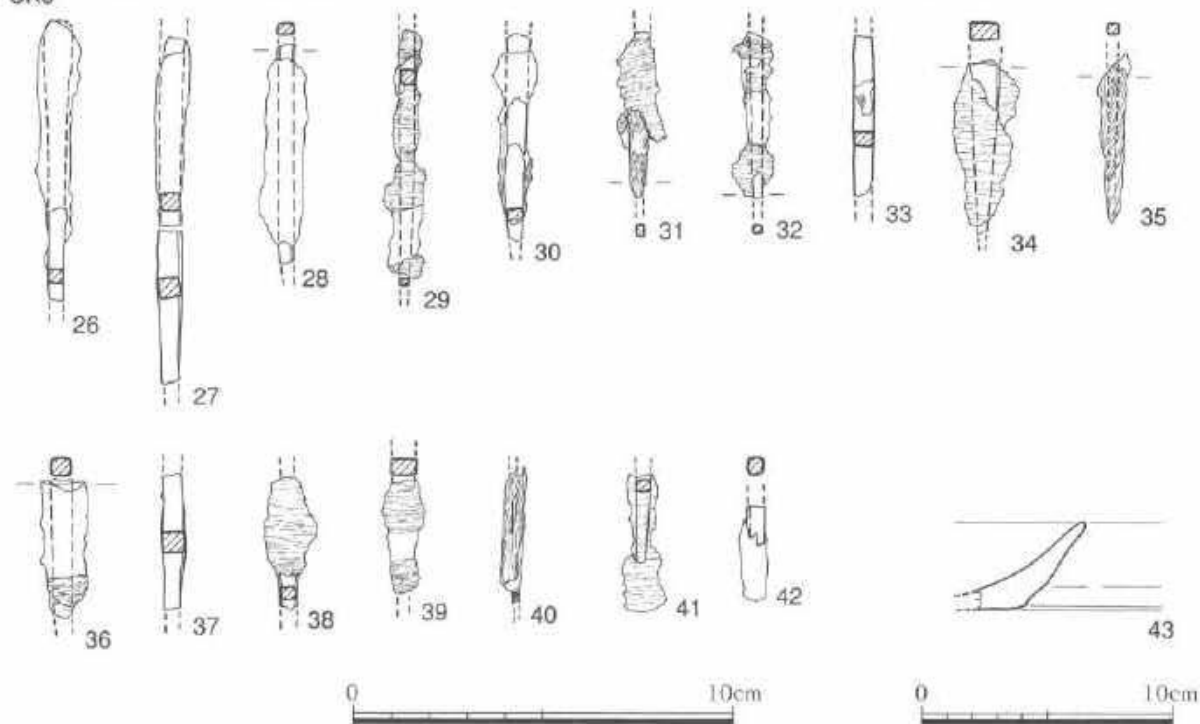
出土遺物 土器片が出土したが、小破片で図示できないため割愛した。



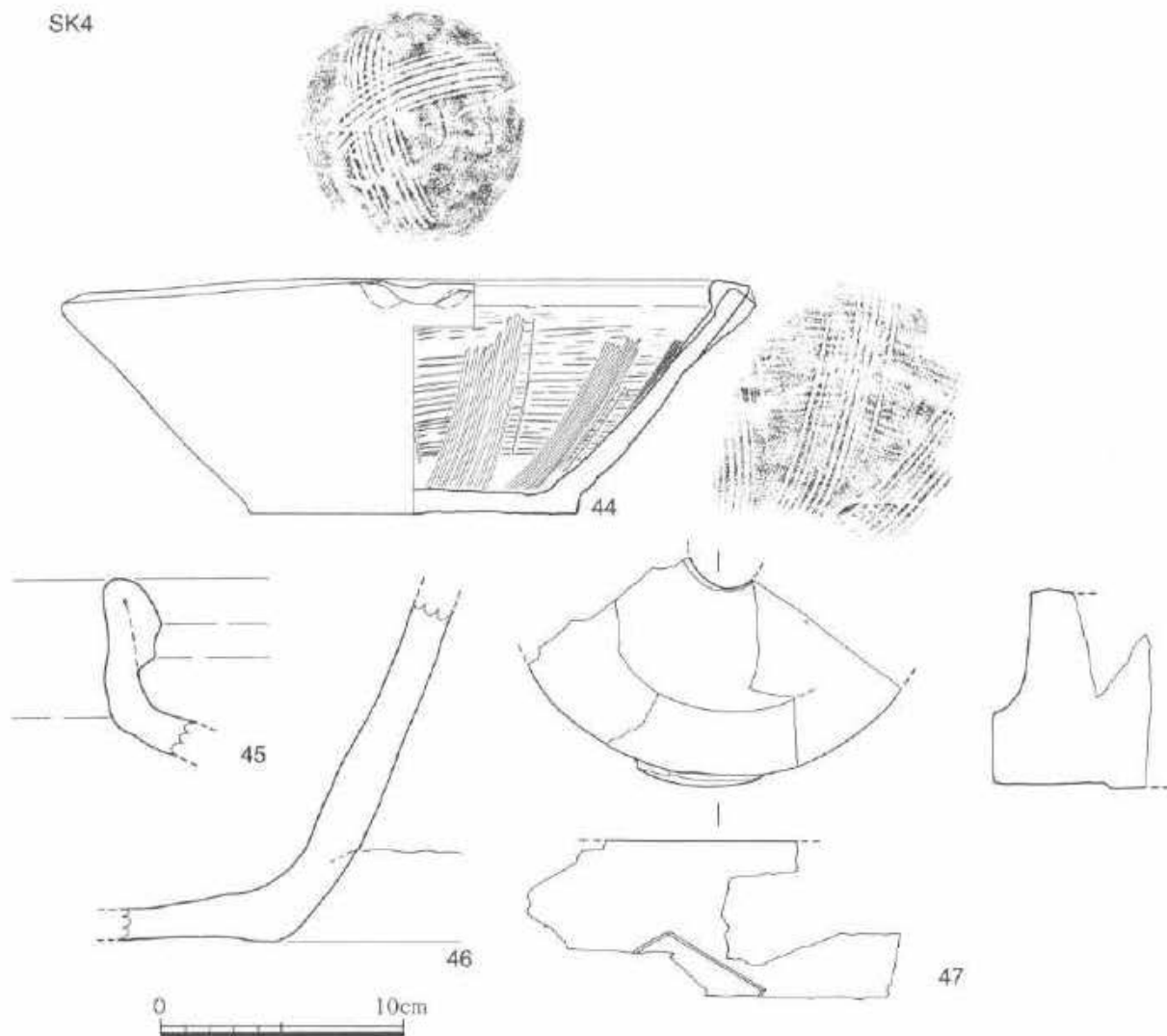
第8図 SK1～5・10実測図 (S=1/40)



SK3



SK4



第9図 SK3・4出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

溝

S D 1 調査区北側西に位置し、東西方向にのびる。東端はやや丸くなり膨らむ。長さ2.2 m、深さ最大23cmを測る。

出土遺物 土器片が出土したが、小破片で図示できないため割愛した。

S D 2 S D 1の南側にほぼ平行して東西方向にのびる。東側をS B 1-2 aに、西側は攪乱溝に切られる。残存長3.3 m、深さ最大28cmを測る。

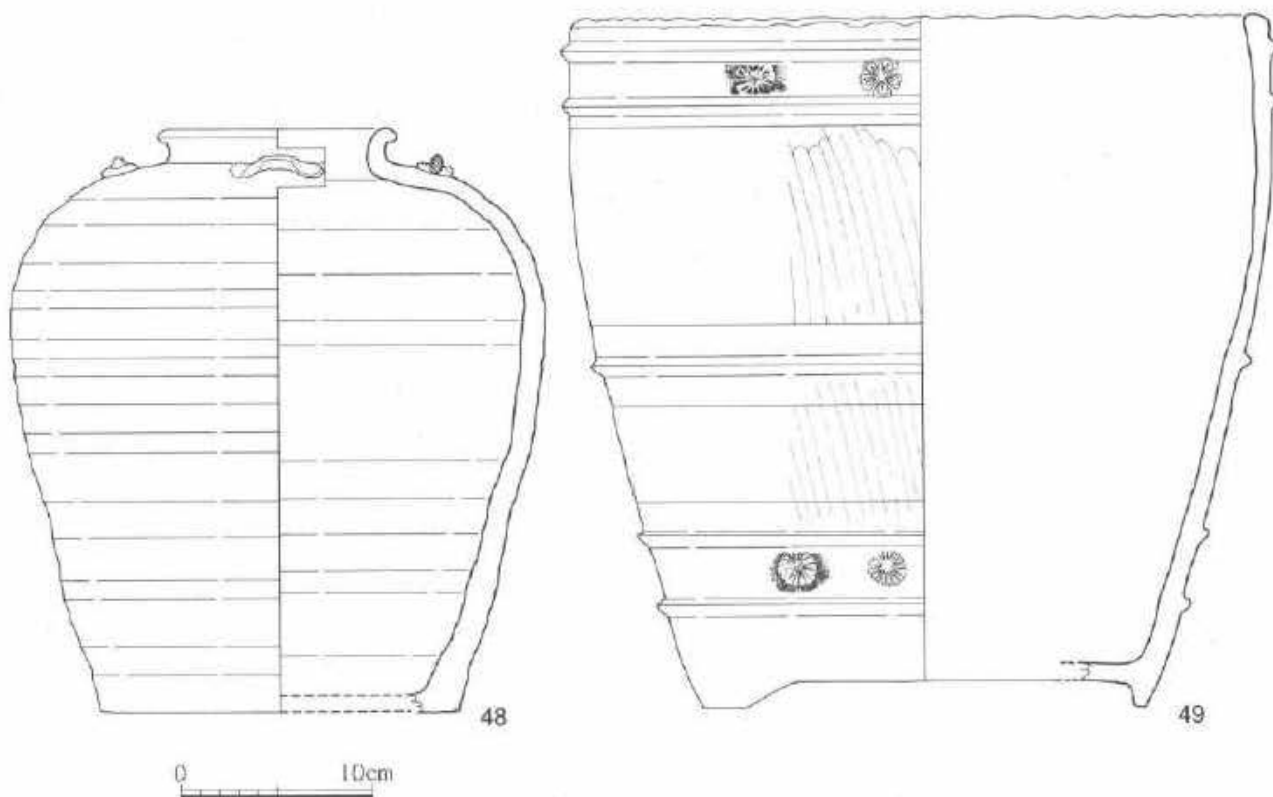
出土遺物 土器片が出土したが、小破片で図示できないため割愛した。

S D 3 調査区中央南よりに位置し、逆「コ」字形に展開する。南東端はS B 2 gに、西側は攪乱溝に切られる。長さは北側から4.6 m、9.4 m、6.3 mを測る。深さは5～15cmを測る。南側部分では、幅5 cmほどの細い溝が確認された。板塀の痕跡とも考えられるが、他の場所では確認することができなかったため可能性は低いものと考えられる。

出土遺物 (第17図、図版8) 埋土から土師器坏、瓦質土器火鉢が出土した。

S D 6 調査区中央付近に位置し、南側にS A 1、北側にS K 10がある。東西方向にのび西側は調査区外へとつづく。長さ5.7 m、幅最大1.2 m、深さ最大32cmを測る。断面は逆台形を呈している。この溝を水場として利用したとすると、北側に広がる小礫群は排水のために敷き詰められたものと考えられる。

出土遺物 (第17図、図版8) 埋土から土師器小皿・坏、瓦器碗が出土した。



第10図 S K 4出土遺物実測図 (S = 1/4)

## 2. 第Ⅱ次遺構面の調査

第Ⅰ面より東部で30cm、西部で50cmほどの厚さで整地層が存在していたので、これを重機により取り除き遺構が確認された地山面までさげた。精査の結果、柵列（S A）、掘立柱建物（S B）、井戸（S E）、溝（S D）、不明遺構（S X）を検出した。以下主要な各遺構について述べる。

### 柵列

S A 2（第11図、図版4）S B 3に西接して南北に展開する4間の柵列である。桁行方位をN－1°－Wにとる。柱穴の深さは最大で42cmを測る。軸長は北から1.0、1.5、1.3、1.5 mを測る。

出土遺物（第4図、図版5）土師器が出土した。

S A 3（第11図、図版3）S A 2に南接してL字に展開する5間の柵列である。柱穴の深さは最大で37cmを測る。軸長は北から1.3、1.4 m、ここで東折して1.2、1.4、1.1 mを測る。aには柱を固定するための小礫が検出された。遺物は出土しなかった。本遺構は、S A 2から繋がる一連のものでS B 3とセットになるものと考えられる。

### 掘立柱建物

S B 3（第12図、図版4）調査区中央部北に展開する1間×2間の掘立柱建物である。桁行方位をN－8°－Wにとる。楚板石の残存するものもある。柱穴の深さは最大で35cmを測る。柱間は短軸側が2 m、長軸側が2.8、2.2 mを測る。

出土遺物（第4図、図版5）土師器の坏が出土した。

### 井戸

S E 1（第13図、図版4）調査区中央南側に位置し、南端は調査区外へ広がる。平面はほぼ円形を呈す。約50°の角度で50cm程掘り下げたのち、75～80°の角度で1.7 m程掘り下げている。底部のプランも円形で、南側に50cmの石組が一部残存している。また、北側には割れた白が杭により固定され、石組とともに枠を形成していたと考えられる。埋土は黒色粘質土で上部から底部まで変化は確認できなかった。そのため、廃絶時に一括して埋められたものと考えられる。

出土遺物（第14～16図、図版6・7）埋土中より土師器小皿・坏、土師質土器、白磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗小坏、同安窯系青磁碗、常滑大甕、木製品板材・臼・杭が出土した。

### 溝

S D 10 調査区中央付近に東西方向にのび、西端はピットに切られる。長さは2.8 m、幅は最大で70cm、深さは最大10cmを測る。残存状況は非常に悪い。

出土遺物（第17図、図版8）埋土中より土師器坏が出土した。

S D 15 調査区西側に南北方向のび、南端は消滅する。長さは2.8 m、幅は最大で65cm、深さは最大6 cmを測る。残存状況は非常に悪い。

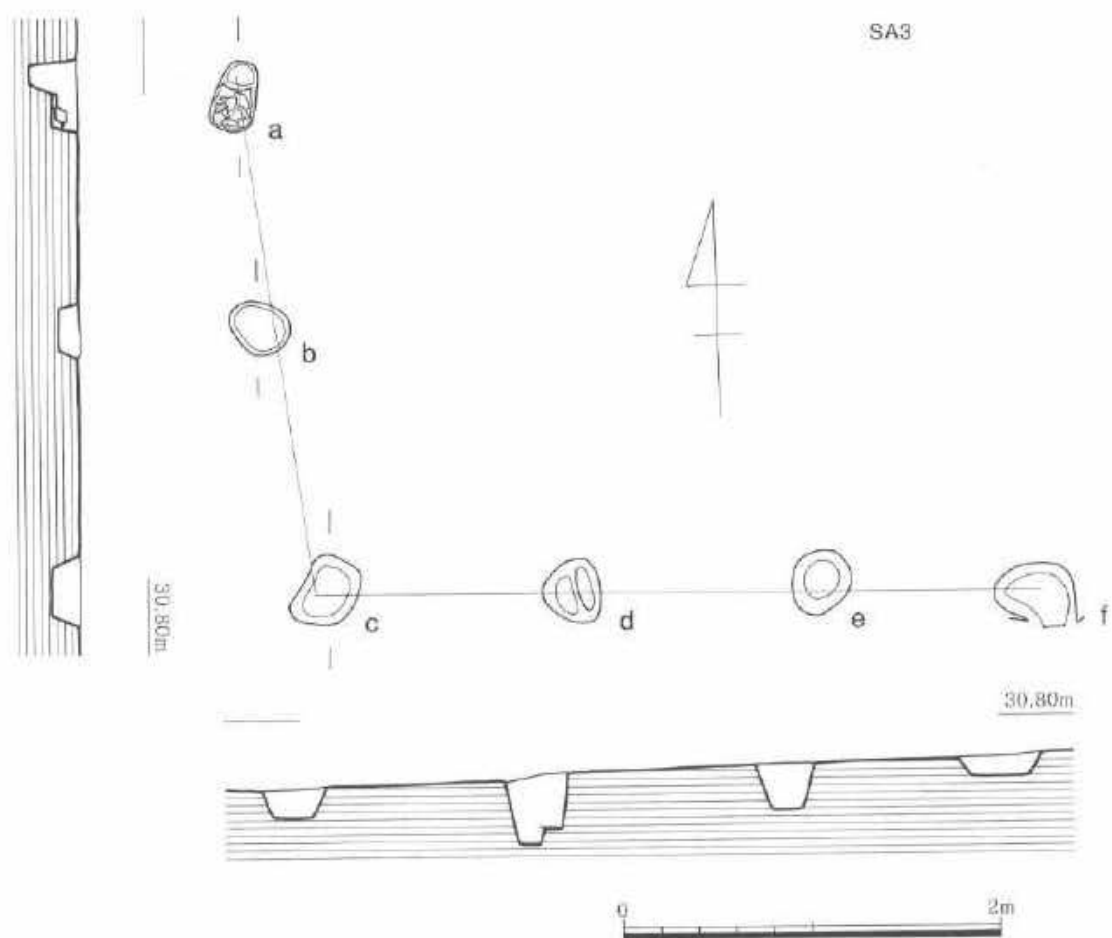
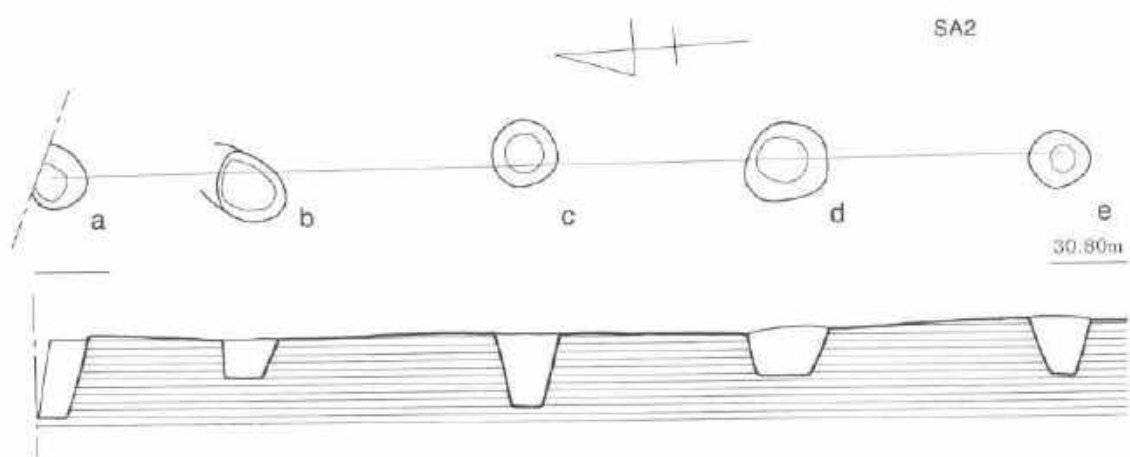
出土遺物（第17図、図版8）埋土中より土師器小皿が出土した。

### 不明遺構

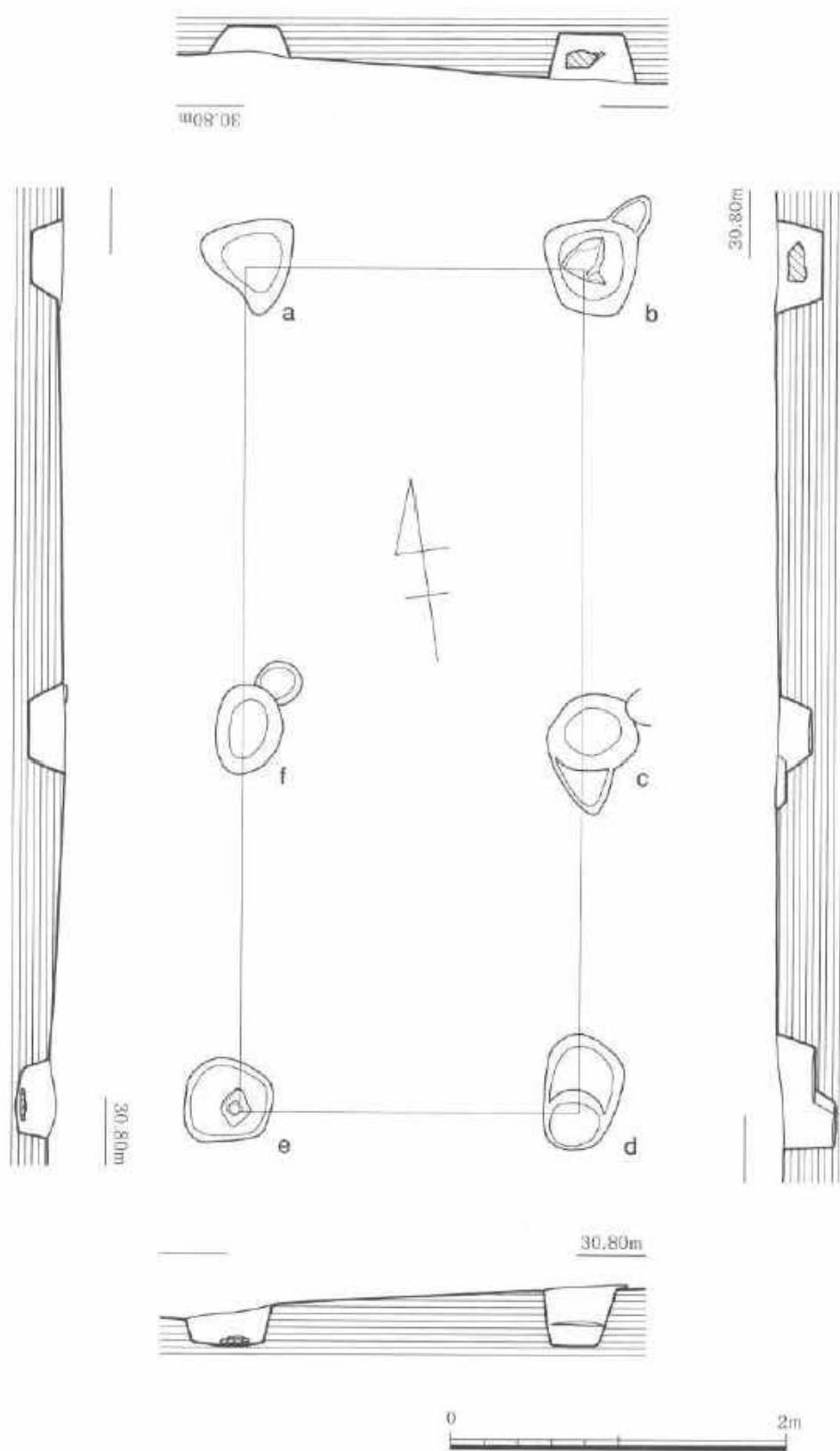
S X 15 調査区南側に位置し、垂な形を呈す。深さは最大30cmである。遺構の性格は不明である。

出土遺物（第17図、図版8）埋土中より土師器坏、瓦器碗、須恵質土器すり鉢が出土した。

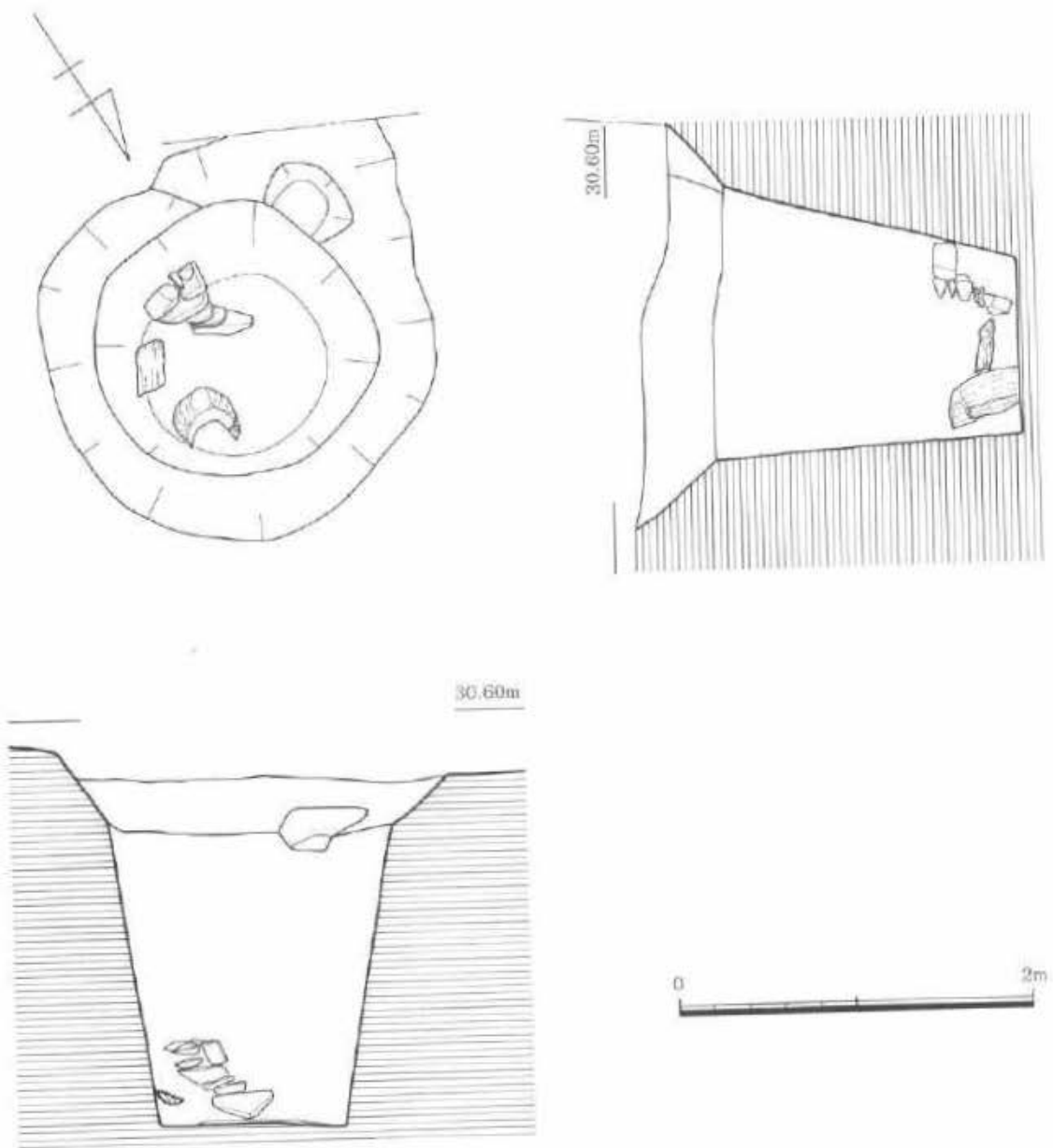
整地層（第18図、図版8）第Ⅰ次遺構面から第Ⅱ次遺構面の間に存在した整地層から出土した遺物である。遺物は土師器小皿・坏、瓦器碗、瓦質土器火鉢、土師質土器片口鉢・すり鉢、白磁碗、肥前



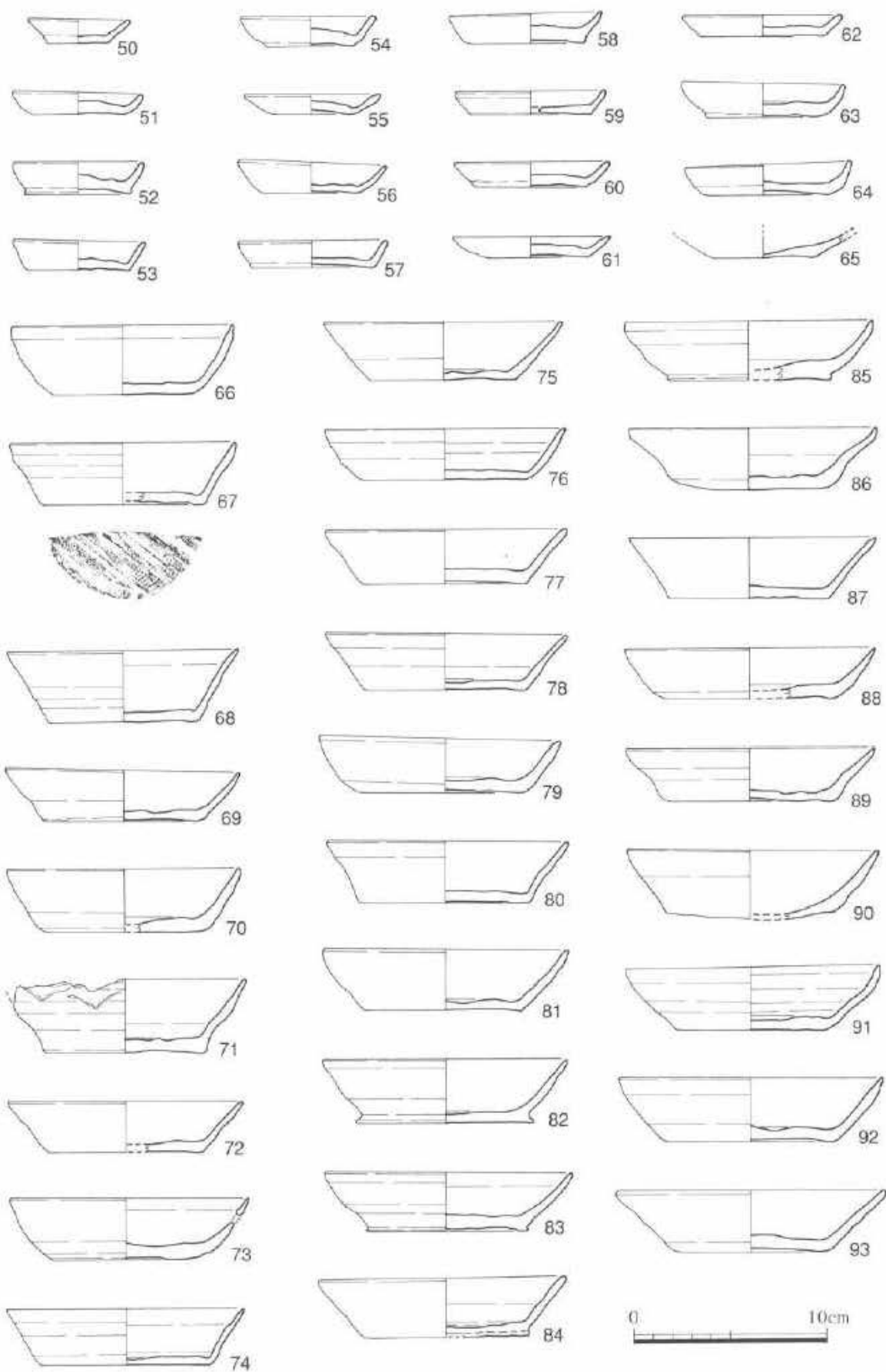
第11図 SA2・3実測図 (S=1/40)



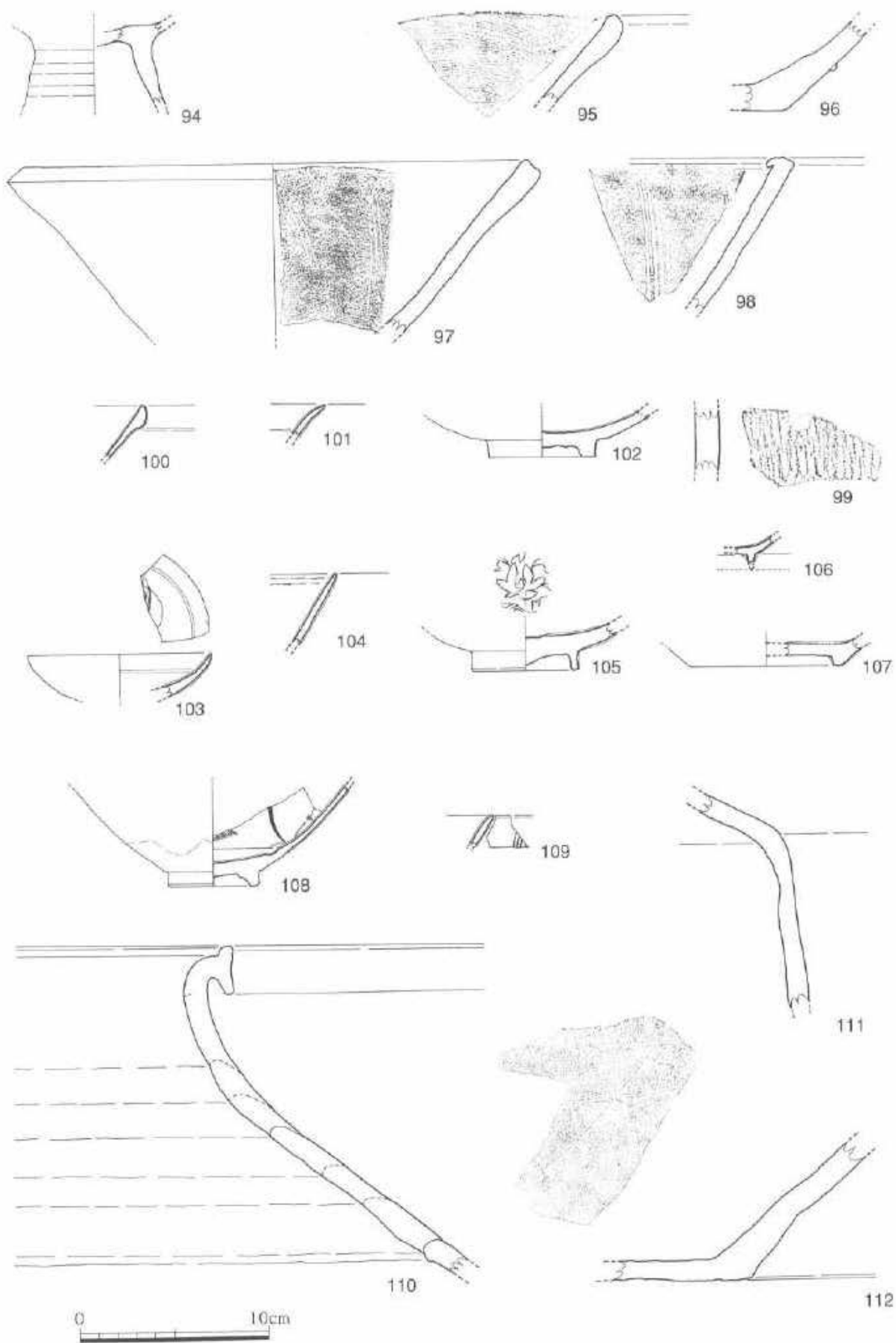
第12図 SB 3実測図 (S=1/40)



第13図 SE1実測図 (S=1/40)

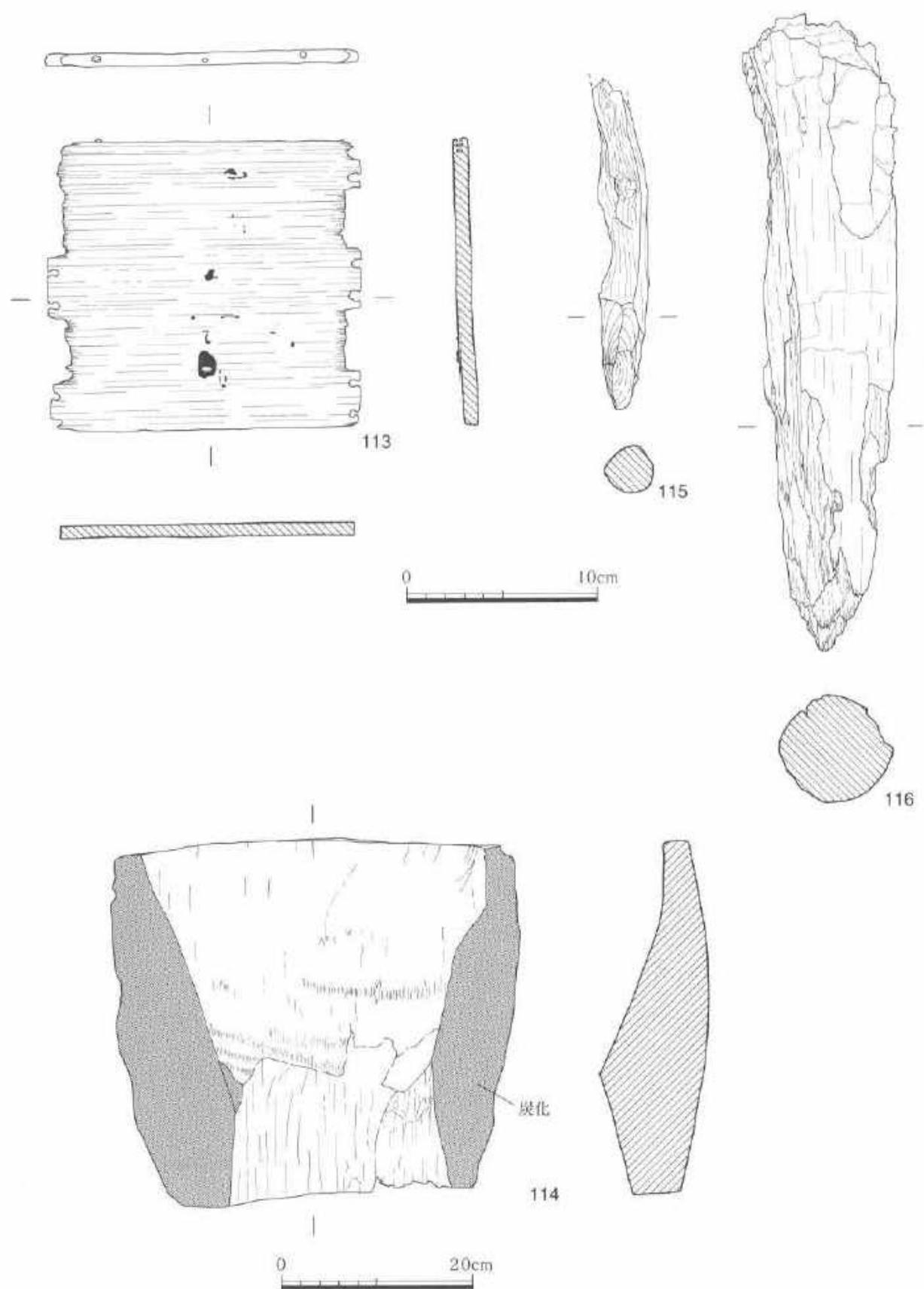


第14图 SE1出土遺物実測図1 (S=1/3)

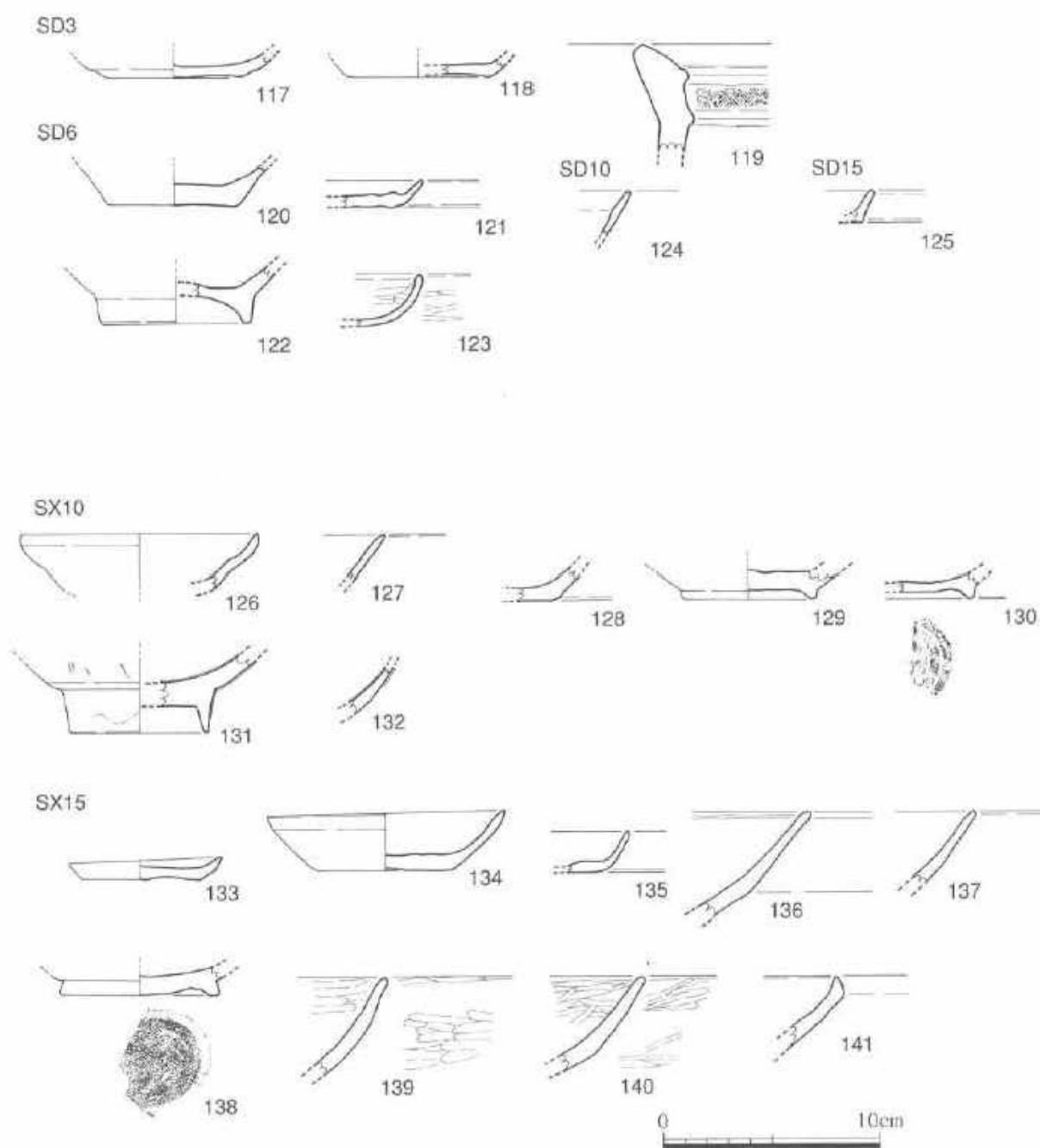


第15図 SE1出土遺物実測図2 (S=1/3)

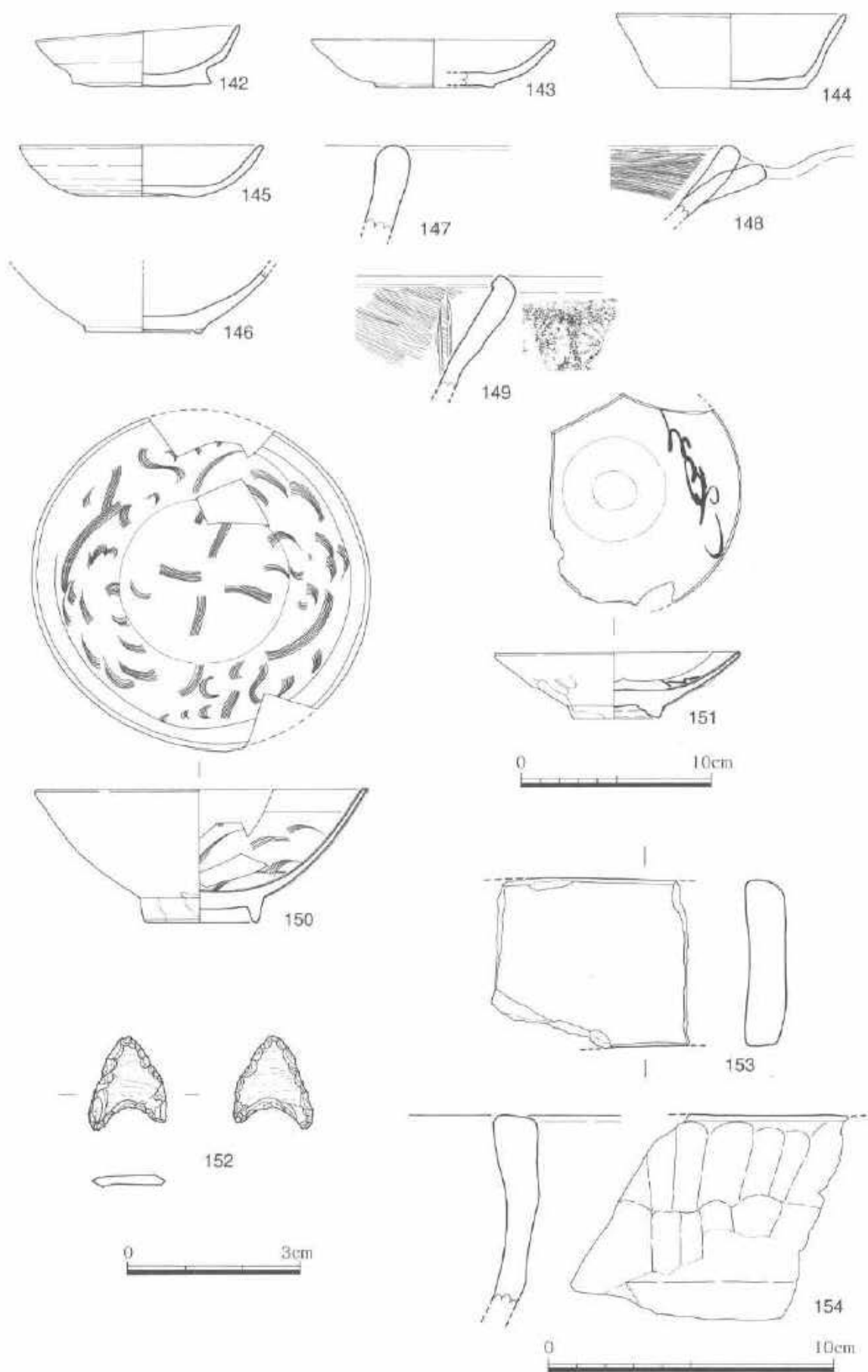




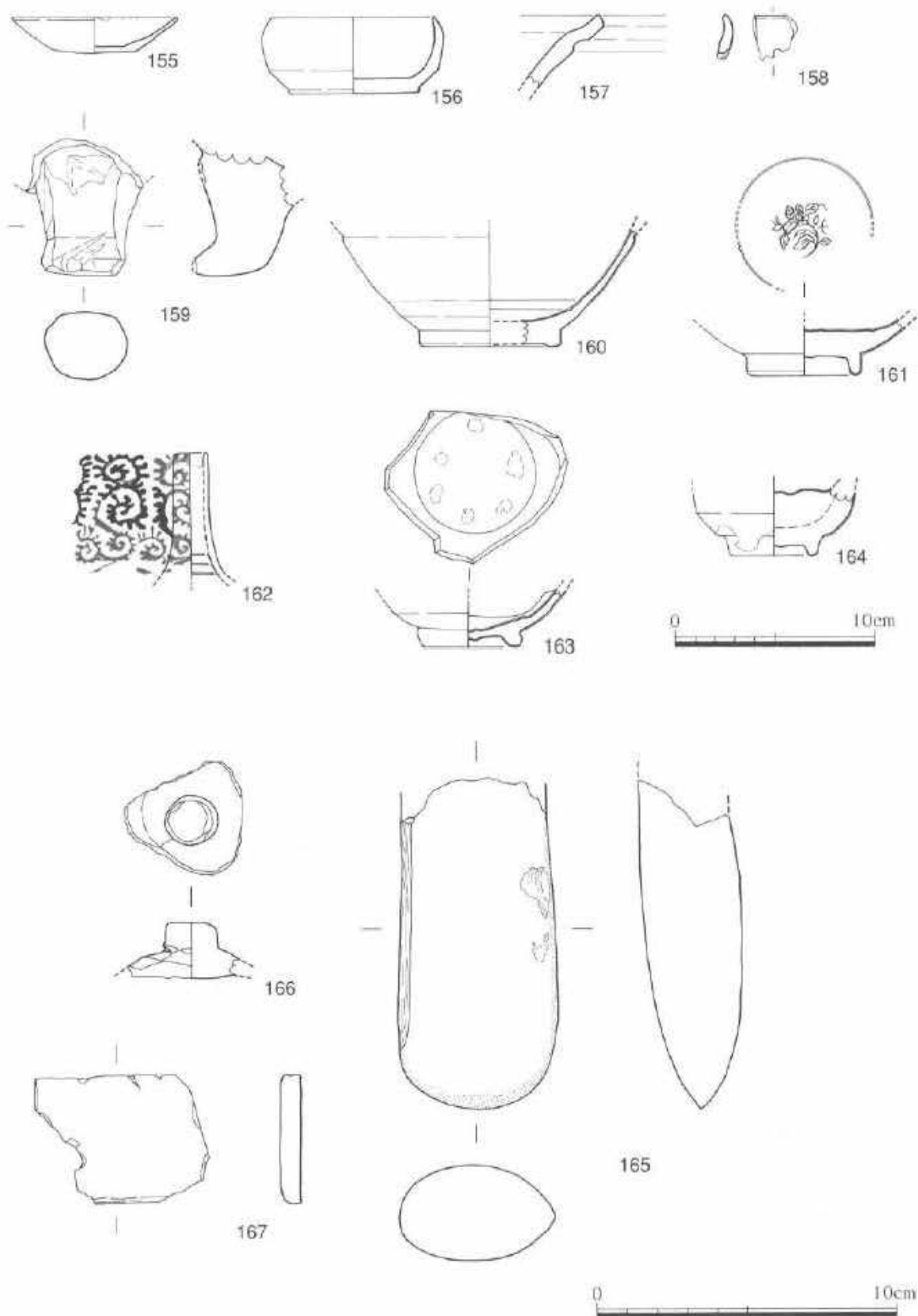
第16図 SE1出土遺物実測図3 (S=1/3・1/6)



第17図 SD・SX出土遺物実測図 (S=1/3)



第18図 整地層出土遺物実測図 (S=1/1・1/2・1/3)



第19図 表採出土遺物実測図 (S = 1/2 · 1/3)

系陶磁器浅形碗、石鉢、砥石、石鍋が出土した。

表採（第19図、図版8）第Ⅰ次遺構面の遺構検出中や清掃時に出土した遺物を表採として取り扱った。遺物は土師器坏、須恵器甕、瓦質土器獣脚、白磁碗、龍泉窯系青磁碗、肥前系陶磁器德利、粉引唐津山茶碗、褐釉陶器碗、磨製石斧、石蓋、砥石が出土した。

## 第3章 ま と め

ここで本調査地における主要な遺構のうち時期を特定できそうなものについてまとめる。

### 第Ⅰ次遺構面

S A 1 及び S B 1・2 は、土師器小皿・坏、油滴天目碗、白磁碗が出土した。土師器はロクロ成形で、底部切り離しが回転系切りである。法量から16世紀以降になると考えられる。白磁は整地層の混入とも考えられる。

S K 4 は、瓦質土器の火鉢、すり鉢、備前焼の大甕、四耳壺、石臼が出土した。火鉢は体部が筒状から樽状に移行していくものと考えられ、16世紀中頃から17世紀、備前焼の大甕、四耳壺も同時期のものと考えられる。

第Ⅰ次遺構面の遺構については、12世紀中頃から17世紀までの時期を考えられるが、時期に開きがあり、伝世品や整地層に含まれる遺物が混入している可能性もあり、明確な時期を言い難い。あえて時期を断ずれば、同時期の出土遺物が集中する16世紀中頃を時期と判断したい。

### 第Ⅱ次遺構面

S B 3 は、底部切り離しが回転系切りの土師器が出土した。細片のため詳細は不明だが、形態から13世紀末から14世紀中頃か。

S E 1 は、土師器、瓦質土器すり鉢、白磁碗、青磁碗、常滑大甕が出土した。土師器小皿・坏は法量から13世紀中頃から14世紀末か。白磁、青磁からは11世紀後半から14世紀後半。常滑焼大甕からは、14世紀中頃以降と考えられる。

S X 15 は、土師器坏、瓦器碗、須恵質土器すり鉢が出土した。土師器は法量から13世紀末で、器壁が厚くロクロ成形特有のシャープさがあまり見られない。瓦器碗は、11世紀末から13世紀後半と考えられる。須恵質土器は小片で詳細不明だが、東幡系のものか。S B 3、S E 1 よりもやや古い可能性がある。

第Ⅱ次遺構面の遺構については、11世紀末から15世紀前半までと考えられる。しかし、一番古い貿易陶磁器は伝世している可能性がある。従って13世紀中頃からと判断したい。

以上のことから、本遺跡は13世紀後半から15世紀前半にかけて営まれたのち、16世紀になり大規模な整地が行われ再び利用されたと考えられる。この時期はちょうど「大宮司氏俊」が「足利尊氏」を薦ヶ岳城に招き入れた時期（1336年）と、「大宮司氏貞」が修築し一族の本城とした時期（1560年）に符合する。城を整備すると同時に城下も整備した可能性を十分考えることができるが、調査例と面積が少ないためははっきりと言えない。今後の調査などによる資料の増加に期待したい。

## 参考文献

- |                           |      |                  |
|---------------------------|------|------------------|
| 『宗像 埋蔵文化財発掘調査報告書』—1986年度— | 1987 | 宗像市教育委員会         |
| 『武丸原』宗像市文化財調査報告書第17集      | 1988 | 宗像市教育委員会         |
| 『福岡県宗像市遺跡等分布地図』           | 1994 | 宗像市教育委員会         |
| 『むなかたの文化財』平成16年度文化財保護事業   | 2006 | 宗像市教育委員会         |
| 『宗像市史』史料編第一巻 古代・中世Ⅰ       | 1999 | 宗像市              |
| 『宗像市史』通史編第二巻 古代・中世・近世     | 1995 | 宗像市              |
| 『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第7集      | 1983 | 太宰府市教育委員会        |
| 『篠振遺跡』太宰府市の文化財第11集        | 1987 | 太宰府市教育委員会        |
| 『大宰府条坊跡XⅤ』—陶磁器分類編—        | 2000 | 太宰府市教育委員会        |
| 『大内氏館跡Ⅶ』山口市埋蔵文化財調査報告書第23集 | 1987 | 山口市教育委員会         |
| 『大内氏館跡Ⅸ』山口市埋蔵文化財調査報告書第43集 | 1992 | 山口市教育委員会         |
| 『乙益重隆先生古希記念論文集』           | 1990 | 乙益重隆先生古希記念論文集刊行会 |
| 『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編    | 1995 | 真陽社              |
| 『考古学ライブラリー23 常滑焼』赤羽 一郎著   | 1984 | ニューサイエンス社        |

表 陵巖寺馬場笠遺跡 2 次調査遺物観察表 1

遺物 NO	遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態特徴	手法特徴	胎土	気味	色調	備考
1	SA-1d	土師器	小皿	—	—	—	口縁から底部片。多少ひずんでいる。	内外面回転ナデ。内面底部一部に不定方向ナデ。外面底部回転糸切り及び板状圧痕。	1mm以下の砂粒、及び雲母を多く含む。緻密である。	良好	内外一様茶色	—
2	SA-1a	土師器	坏	—	—	—	口縁部小破片。	内外面回転ナデ。	1mm以下の砂粒、及び雲母を多く含む。不純物が少し目立つ。	やや良	内外一様白色	—
3	SA-1c	土師器	坏	—	(8.2)	—	底部1/2部残存。	内底部磨耗により調整不明、外底部回転糸切り。	1mm以下の茶色粒・砂粒、及び雲母を多く含む。やや粗い。	やや良	内外一様褐色	—
4	SA-2c	土師器	小皿	—	(8.9)	—	底部1/3部残存。	内底部回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の砂粒、及び微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
5	SA-1a	土師器	坏	—	—	—	底部部小破片。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の砂粒、及び微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
6	SA-1b	土師器	坏	—	—	—	底部小破片。	全面磨耗により調整不明。	1mm以下の砂粒、及び雲母を多く含む。やや粗い。	やや良	内外一様褐色	ローリングを受けており、質地層からの流入の可能性。
7	SA-1b	須恵質土器	坏/輪	—	—	—	底部小破片。	内面底部磨耗により調整不明。外面ヨコナデ。外底部回転ヘラナリ。	1mm以下の砂粒、及び雲母を含む。やや粗い。	やや良	内外一様色 ～灰白色	—
8	SA-2f	土師器	小坏?	—	—	—	底部小破片。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の砂粒、及び微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
9	SB-1h	土師器	坏	11.8	6.9	3.2	口縁から底部片。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	微細な砂粒・雲母、及び1～2mmの茶色粒を多く含む。やや粗い。	良好	内外一様褐色～褐色	—
10	SB-1c	土師器	坏	11.7	8.7	2.5	口縁部小破片。	内外磨耗により調整不明。外底部わずかに回転糸切り。	1mm以下の砂粒・茶色粒、及び雲母を含む。緻密である。	良好	内外一様茶色	—
11	SB-1b	土師器	坏	—	—	—	口縁部小破片。	内外面回転ナデ。	1mm前後の砂粒・茶色粒を多く含む。やや粗い。	やや不良	内外一様褐色 ～淡褐色	—
12	SB-1d	土師器	小坏	—	—	1.8	口縁から底部片。底部から口縁にかけて内湾する。	全面磨耗により調整不明。	1mm以下の砂粒・茶色粒、及び雲母を含む。緻密である。	やや不良	内外一様～淡褐色	—
13	SB-1f	土師器	坏	—	—	—	底部小破片。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の砂粒、及び微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外一様黄色	—
14	SB-1e	土師器	小皿	—	—	—	底部片。厚い。	内外面回転ナデ、外面一部磨耗のため調整不明。外底部回転糸切り。	1mm前後の白色砂粒、及び微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
15	SB-1h	土師器	小皿	—	—	—	底部小破片。	内外面回転ナデ。内底部一部に不定方向ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の砂粒を含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
16	SB-1b	油滴天目	碗	—	—	—	口縁小破片。	黒色不透明釉が、口縁部を除く全面に施釉されている。口縁部においては釉がふき取られている。	淡灰色を呈し、不純物をほとんど含まない。緻密である。	良好	内外一様黒色の上に 淡い茶色が流れる	—
17	SB-2a	土師器	坏	—	—	2.1	口縁部から底部の小破片。	内外面は回転ナデ。底部切り離しは回転糸切り。	微細な砂粒・茶色粒・雲母を少し含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—

表 陵殿寺馬場笠遺跡 2 次調査遺物観察表 2

遺物 NO	遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態特徴	手法特徴	胎土	焼成	色調	備考
18	SB-2c	土師器	杯	—	—	—	口縁部小破片。	内外面とも回転ナデ	1mm以下の白色粒・微細炭屑を多く含む。やや粗い。	良好	内外一様褐色	—
19	SB-2g	土師器	杯×小皿	—	—	—	底部1/2残存。	内外面は回転ナデ、内底ナデあり。底部切り離しは回転糸切り。	2~3mmの砂粒を僅かに、1mm以下の白色粒を多く含む。やや粗い。	良好	内外一様赤褐色	—
20	SB-2e	白磁	碗	—	—	—	口縁部小破片。	釉は淡灰緑色を帯びる透明釉。	微細な黒色粒を含む。緻密である。	良好	内外一淡灰緑色	白磁施V類
21	SB-3b	土師器	杯	—	—	—	口縁部小破片。	内外面とも回転ナデ	微細な白色粒・微細炭屑を多く含む。やや粗い。	良好	内外一様褐色	—
22	SB-3f	土師器	杯	—	5.6	—	口縁部小破片。	内外面とも回転ナデ	微細な砂粒・炭屑を少し含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
23	SB-3e	土師器	杯	—	—	—	底部のみ。	内外面は回転ナデ、内底ナデあり。底部切り離しは回転糸切り。	微細な砂粒・炭屑を少し含む。緻密である。	良好	外一褐色・内白色混 内一褐色	—
24	SB-3f	土師器	杯	—	—	—	底部から体部小破片。	内外面は回転ナデ。底部切り離しは回転糸切り。	微細な砂粒・炭屑を少し含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
25	SB-3b	土師器	小皿	—	—	—	底部1/3破片。歪んでいる。	磨耗により調整不明。	微細な白色粒・微細炭屑を多く含む。やや粗い。	良好	内外一様褐色	—
26	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ73+ <sub>10</sub>	ほぼ全面にサビ付着。端部で丸くなっている。	—	—	—	—	—
27	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ905+ <sub>10</sub>	—	—	—	—	—	—
28	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ58+ <sub>10</sub>	ほぼ全面にサビ付着。	—	—	—	—	—
29	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ67+ <sub>10</sub>	ほぼ全面に木質付着。	—	—	—	—	—
30	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ55+ <sub>10</sub>	部分的にサビ。及び木質付着。	—	—	—	—	—
31	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ439+ <sub>10</sub>	ほぼ全面に木質付着。	—	—	—	—	—
32	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ44+ <sub>10</sub>	ほぼ全面に木質付着。	—	—	—	—	—
33	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ42+ <sub>10</sub>	—	—	—	—	—	—
34	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ45+ <sub>10</sub>	ほぼ全面に木質付着。	—	—	—	—	—



表 陵殿寺馬場笠遺跡 2 次調査遺物観察表 3

遺物 NO	遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態特徴	手法特徴	胎土	焼成	色調	備考
35	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ 4.2+ $\alpha$	ほぼ全面に木質付着。	—	—	—	—	—
36	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ 3.6+ $\alpha$	ほぼ全面に木質付着。	—	—	—	—	—
37	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ 3.5+ $\alpha$	—	—	—	—	—	—
38	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ 3.5+ $\alpha$	ほぼ全面に木質付着。	—	—	—	—	—
39	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ 2.9+ $\alpha$	ほぼ全面に木質付着。	—	—	—	—	—
40	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ 3.4+ $\alpha$	ほぼ全面に木質付着。	—	—	—	—	—
41	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ 3.6+ $\alpha$	ほぼ全面に木質付着。	—	—	—	—	—
42	SK-3	鉄製品	鉄釘	—	—	長さ 2.5+ $\alpha$	ほぼ全面にサビ付着。	—	—	—	—	—
43	SK-3	土師器	杯	—	—	—	口縁部から底部 1/5 残存。体部はひらく。	内外面とも回転ナデ。底部切り離しは回転糸切り。	1mm 以下の砂粒を含む。緻密である。	良好	外—明褐色 内—黄褐色	—
44	SK-4	瓦質土器	すり鉢	28.6/28.8	13.65	9.7	口縁から底部片。全体の 1/3 欠損。	内面横方向から縦方向にむけたすり目。外面ナデ。外底部板状圧痕。	1~3mm の砂粒を少し含む。緻密である。	良好	内外—暗灰～白黄色	—
45	SK-4	常滑	大甕	—	—	7.3+ $\alpha$	口縁部小破片。	残存部全体横ナデ。	1mm 前後の砂粒を多く含む。やや緻密である。	良好	内外—暗灰赤色 ～暗赤色	—
46	SK-4	常滑	大甕	—	—	14.05+ $\alpha$	底部破片。体部一部に粘土跡が目。	内面横ナデ。外面工具による上下方向ナデ。外底部調整不明。	1mm 前後の砂粒と 5mm 程の石を含む。やや粗い。	良好	内外—暗灰色 ～暗赤色	—
47	SK-4	石製品	石臼	—	—	—	全体の 1/5 残存。	外面部分的に不定方向の細かいみち。	—	—	内外—暗紫色	—
48	SK-4	瓦質土器	火鉢	(34.6)	(23.5)	36.0	全体の 1/3 残存。不定波状口縁をなす。体部上下にスタンプがあり。体部に後縁が 5 条巡る。脚は 3 つか 4 つか不明。	内面不定方向ナデ。外面横ナデ。及びへう状工具による縦方向ミガキ。外底部ナデ。	1mm 程度の砂粒を少し含む。緻密である。	良好	内外—灰色～暗灰色	—
49	SK-4	常滑/備前	四耳壺	(11.4)	(18.8)	30.6	全体の 1/3 残存。口縁部に 4 つの耳。	内面から外面口縁部にかけて横ナデ。外面胴部から底部にかけてへう状工具による横ナデ。外底部は砂付着により調整不明。	1mm 前後の白色・黒色砂粒を少し含む。緻密である。	良好	内面—暗赤茶色 外面—黒色～暗赤茶色 芯—明灰色	—
50	SE-1	土師器	小皿	5.2	3.2	1.25	外面に付着物あり。少し焼きひずんでいる。	内面回転ナデ。内面底部風化のため調整不明。外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm 以下の白色砂粒。微量の石英・雲母を含む。やや粗い。	良好	内外—淡褐色	—
51	SE-1	土師器	小皿	6.7	4.8	1.1	少し焼きひずんでいる。	内面風化のため調整不明。外面回転ナデ。外底部は回転糸切り。	1mm 程の白色砂粒。微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外—淡褐色	—

表 陵巖寺馬場笠遺跡 2 次調査遺物観察表 4

遺物 NO	遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態特徴	手法特徴	胎土	焼成	色調	備考
52	SE-1	土師器	小皿	6.8	5.5	1.65	口縁部～底部片。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外一明茶褐色	—
53	SE-1	土師器	小皿	6.8	5.3	1.5	口縁が短く延びる。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒、微量の石英を含む。緻密である。	良好	内外一明赤褐色	—
54	SE-1	土師器	小皿	6.9	4.4	1.55	口縁部～底部片。少し焼きひずんでいる。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒を含む。少し不純物が目立つ。	良好	内外一淡褐色	—
55	SE-1	土師器	小皿	(7.1)	3.9	1.0	口縁が僅かに外に開く。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒、微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外一淡黄褐色	—
56	SE-1	土師器	小皿	7.6	5.0	1.6	口縁がひずんでいる。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒、微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外一淡褐色	—
57	SE-1	土師器	小皿	7.6	6.3	1.4	ほぼ完形。口縁部を僅かに欠く。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒、微量の石英・雲母を含む。緻密である。	良好	内外一淡褐色	—
58	SE-1	土師器	小皿	7.6	5.9	1.6	底部片。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の黒色砂粒を含む。緻密である。	良好	内外一灰黄褐色	—
59	SE-1	土師器	小皿	(7.8)	(6.3)	1.2	底部に穿孔残存。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り後、板ナデ。	1mm以下の赤色・白色砂粒を含む。不純物が少し目立つ。	良好	内外一淡褐色	—
60	SE-1	土師器	小皿	(8.1)	5.7	1.3	底部片。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒をわずかに含む。緻密である。	良好	内外一淡褐色	—
61	SE-1	土師器	小皿	8.2	5.05	1.15	口縁部片。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	黒色・白色砂粒、微量の雲母を含む。やや不純物を含む。	良好	内外一淡褐色	—
62	SE-1	土師器	小皿	(8.4)	6.4	1.1	口縁部1/2残。	内面回転ナデ及び不定方向ナデ。外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒、微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外一黄褐色	—
63	SE-1	土師器	小皿	8.5	5.4	1.8	ほぼ完形。口縁部を僅かに欠く。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒、微量の雲母を含む。やや粗い。	良好	内外一淡褐色	—
64	SE-1	土師器	小皿	8.7	6.4	1.6	焼きひずんでいる。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の赤色・白色砂粒、微量の石英・雲母を含む。やや粗い。	良好	内外一淡赤褐色 外底部一淡黄褐色	—
65	SE-1	土師器	—	8.2+α	5.3	1.15+α	底部片。	内面回転ナデ及び不定方向ナデ。外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒、微量の石英を含む。緻密である。	未焼成?	内外一白褐色	—
66	SE-1	土師器	坪	(11.4)	7.2	3.6	口縁部～底部片。外面に灰斑。	内面回転ナデ及び不定方向ナデ。外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒、微量の石英を含む。緻密である。	良好	内外一明赤褐色	—
67	SE-1	土師器	坪	(11.6)	(8.4)	3.2	外面一部に爪もしくは器具の痕あり。焼きひずんでいる。	内面回転ナデ。内面底部指ナデ。外面回転ナデ。外底部は回転糸切り及び板状圧痕。	1mm程度の白色砂粒、微量の石英・雲母を含む。不純物が少し目立つ。	良好	内外一明茶褐色	—
68	SE-1	土師器	坪	(12.0)	7.9	3.6	底部片。	内外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒を含む。やや粗い。	良好	内外一黄褐色	—

表 陵巖寺馬場笠遺跡 2 次調査遺物観察表 5

遺物 NO	遺構	器種	蓋形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態特徴	手法特徴	胎土	焼成	色澤	備考
69	SE-1	土師器	杯	12.1	7.9	2.7	口縁部を一部欠くがほぼ完形。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒を含む。不純物が少し目立つ。	良好	内外一に濃い黄褐色	—
70	SE-1	土師器	杯	(12.1)	(8.1)	3.3	口縁部片。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1~2mm程の赤色砂粒を多く含む。1mm以下の白色砂粒を僅かに含む。不純物がやや粗い。	良好	内一淡褐色 外一淡黒褐色	—
71	SE-1	土師器	杯	—	8.2	3.8	端部を指で折っている。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り及び指ナデ痕あり。	1mm以下の黒色・白色砂粒を含む。緻密である。	良好	内外一淡褐色	—
72	SE-1	土師器	小皿	(12.2)	(9.0)	2.7	底部片。口縁が僅かに開く。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒、微量の雲母を含む。不純物が少し目立つ。	良好	内外一明赤褐色	—
73	SE-1	土師器	杯	12.3	3.2	7.5	体部に5mm程の楕円形の穿孔残存。内面にスス付着。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1~2mm程の赤色砂粒を多く含む。緻密である。	良好	内外一に濃い褐色	—
74	SE-1	土師器	杯	(12.4)	8.9	2.9	口縁部～底部片。口縁部縁にススが付着。	内外面回転ナデ、内底部不定方向ナデ、外底部回転糸切り。	1mm程の白色砂粒、微量の雲母を含む。緻密である。	良好	外一明赤褐色 内一褐色	—
75	SE-1	土師器	杯	(12.4)	(7.5)	3.0	口縁部～底部片。	内面風化のため調整不明。内面底部の一部に指ナデ痕。外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm程の白色砂粒、微量の石英・雲母を含む。不純物が少し目立つ。	良好	内外一淡褐色	—
76	SE-1	土師器	小皿	(12.45)	8.8	2.7	底部片。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒、微量の雲母・石英を含む。緻密である。	良好	内外一に濃い黄褐色	—
77	SE-1	土師器	杯	(12.4)	8.5	2.8	底部片。外面一部にスス付着。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1~2mm程の赤色砂粒を少し含む。1mm以下の白色砂粒を含む。緻密である。	良好	内一淡灰黄色 外一灰褐色	—
78	SE-1	土師器	杯	12.5	8.4	2.9	口縁部～底部片。僅かに開く。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	黒色・白色砂粒、微量の雲母・石英を含む。不純物がやや粗い。	良好	内外一明黄褐色	—
79	SE-1	土師器	杯	12.5	8.5	2.75	口縁部～底部片。口縁部を僅かに欠く。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm程の白色砂粒、微量の雲母を含む。不純物が少し目立つ。	良好	内外一淡褐色	—
80	SE-1	土師器	杯	12.5	8.7	3.2	ほぼ完形。口縁が短く延びる。	内面は風化のため調整不明。外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm程の白色砂粒を含む。外面に雲母を含んだ泥が付着している。緻密である。	良好	内外一淡褐色	—
81	SE-1	土師器	杯	12.6	8.0	3.15	ほぼ完形。口縁が僅かに開く。	内外面回転ナデ、内面底部に一部指ナデ、外底部回転糸切り。一部板状圧痕。	1mm以下の白色砂粒、微量の石英を含む。緻密である。	良好	内外一明赤褐色	—
82	SE-1	土師器	杯	(12.7)	(9.2)	3.3	口縁部片。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒、微量の石英を含む。緻密である。	良好	内外一明赤褐色	—
83	SE-1	土師器	杯	12.8	8.3	3.1	口縁部～底部片。焼成が非常に良い。	内外面横ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒を含む。緻密である。	良好	外一灰褐色 内一灰黄褐色	—
84	SE-1	土師器	杯	(12.8)	(8.6)	3.1	底部に粘土を貼り付け厚みさせる。	内外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1~3mm程の赤色砂粒を含む。緻密である。	良好	内一淡赤褐色 外一淡褐色	—
85	SE-1	土師器	杯	(12.9)	(8.4)	3.1	口縁部～底部片。一部欠損。	内面回転ナデ、内底部不定方向ナデ、外面回転ナデ、外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒、微量の石英を含む。不純物が少し目立つ。	良好	内外一淡褐色	—

表 陵厳寺馬場笠遺跡 2 次調査遺物観察表 6

遺物 NO	遺構	器種	形状	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態特徴	手法特徴	胎土	焼成	色調	備考
86	SE-1	土師器	環	(12.9)	8.2	3.2	口縁から底部片。体部より外に開く。	内外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒。微量の雲母を含む。不純物が少し目立つ。	良好	内外一様褐色	—
87	SE-1	土師器	環	12.95	8.4	3.2	ほぼ完形。外面に泥が部分的に付着。	内面回転ナデ及び不定方向ナデ。外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒。微量の雲母を含む。不純物が少し目立つ。	良好	内外一様茶褐色	—
88	SE-1	土師器	環	(13.0)	(9.4)	2.6	口縁部片。	内外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒。微量の雲母・石英を含む。やや粗い。	良好	内外一様褐色	—
89	SE-1	土師器	環	(13.0)	(8.6)	2.7	口縁部一底部片。僅かに開く。	内面回転ナデ。外面回転ナデ及び不定方向ナデ。外底部回転糸切り。	1mm程の白色砂粒。微量の石英・雲母を含む。不純物が少し目立つ。	良好	内外一様褐色	—
90	SE-1	土師器	環	(13.1)	8.8	(3.6)	口縁部片。	内外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒。微量の雲母を含む。不純物が少し目立つ。	良	内外一様褐色	—
91	SE-1	土師器	環	13.4	8.0	3.3	焼きひずんでいる。	内外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm程の黒色・赤色・白色砂粒を含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
92	SE-1	土師器	環	(13.75)	8.8	3.3	底部片。	内外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm程の白色砂粒。微量の雲母を含む。やや粗い。	良好	内外一様赤褐色	—
93	SE-1	土師器	環	(14.0)	(7.5)	3.2	表面に雲母等を含んだ泥が付着。僅かに開く。	内外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	白色砂粒・微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
94	SE-1	土師器	台付環?	—	—	4.4+ $\alpha$	小片。外面に雲母を含んだ泥が部分的に付着。	内外面回転ナデ。	1mm以下の白色砂粒。雲母・石英を多く含む。やや粗い。	良好	内外一様褐色	—
95	SE-1	瓦質土器	すり鉢	—	—	4.7+ $\alpha$	口縁部片。口縁端部が僅かに欠損。	内面細かくハケ目。外面横ナデ。	1mm程の白色砂粒。石英を多く含む。やや粗い。	良好	内外一様灰色	—
96	SE-1	瓦質土器	すり鉢	—	—	4.85+ $\alpha$	底体部片。体部下位に尖帯が巡っている。	内外面磨耗により調整不明。	1mm前後の白色砂粒。微量の角閃石・雲母を含む。やや粗い。	やや不良	内外面一様灰色 芯一様灰色	—
97	SE-1	瓦質土器	すり鉢	(28.5)	—	9.1+ $\alpha$	口縁部片。	内面ハケ目。及びすり目。外面ナデ?	1mm程の白色砂粒を多く含む。粗い。	良好	内外一様灰色	—
98	SE-1	瓦質土器	すり鉢	—	—	8.2+ $\alpha$	口縁部小破片。	内面ハケ目及びすり目。内面口縁部から外面にかけて横ナデ。	1mm程の石英をやや多く含む。やや粗い。	良好	内面一様黒色 芯一様灰色	—
99	SE-1	瓦	平瓦	—	—	—	小片。	凸面並行叩き。凹面ナデ。	1mm程の白色砂粒。雲母を多く含む。やや粗い。	良好	内外一様灰色	—
100	SE-1	白磁	碗	—	—	2.85+ $\alpha$	口縁部片。	残存部全体に薄い青灰色を帯びた透明釉。	白色を呈し。黒色粒や気泡を多く含む。やや粗い。	良好	内外一様青灰色	Ⅱ類
101	SE-1	白磁	碗	—	—	1.75+ $\alpha$	口縁部片。	残存部全体に薄い灰緑色を帯びる透明釉。	白色を呈し。黒色粒・気泡・砂粒を含む。やや粗い。	良好	内外一様灰緑色	Ⅲ/Ⅳ類
102	SE-1	白磁	碗	—	5.6	2.45+ $\alpha$	底部片。	内面。及び外面残存部の一部に白色を帯びた透明釉。外底部は回転ヘラケズリにより露胎。	黄白色を呈し。黒色粒・気泡を多く含む。やや粗い。	良	内一様白色 露胎部一様茶褐色	Ⅱ類

表 陵殿寺馬場笠遺跡 2 次調査遺物観察表 7

遺物 NO	遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態特徴	手法特徴	胎土	焼成	色調	備考
103	SE-1	白磁	皿	(9.6)	—	2.3+α	口縁部片。	残存部ほぼ全体に薄い灰緑色を帯びる透明釉。内面に沈線が1条。	白色を呈し、黒色粒や気泡を含む。緻密である。	良好	内外一灰緑色	Ⅱ-1b
104	SE-1	龍泉窯系青磁	碗	—	—	3.8+α	口縁部片。外面には貫入が多く入る。	残存部全体に濃緑灰色を帯びる透明釉。内面に沈線が2条。	淡灰色を呈し、黒色粒を極めて僅かに含む。緻密である。	良好	内外一濃緑灰色	I-4b
105	SE-1	龍泉窯系青磁	碗	—	5.6	2.65+α	底部片。外底部は露胎しており、内底部には草花文スタンプが押されている。	高台を除いた全面に暗緑灰色を帯びた透明釉。	淡灰色を呈し、微細な黒色粒を含む。やや粗い。	良好	内外一暗緑灰色	Ⅱ類
106	SE-1	龍泉窯系青磁	小杯	—	—	1.5+α	高台部小片。	残存部全体に淡い水色を帯びる半透明釉。	灰白色を呈し、黒色粒と気泡を僅かに含む。やや粗い。	良好	内外一淡水色	分類不明 小杯Ⅲ型?
107	SE-1	龍泉窯系青磁	—	—	8.0	1.45+α	底部片。	緑青色を帯びた透明釉を全面に龍軸した後、底部外面のみ釉をカキ取っている。	灰色を呈し、黒色粒を僅かに含む。緻密である。	良好	内外一緑青色	分類不明
108	SE-1	同安窯系青磁	碗	—	5.0	5.25+α	高台から体部1/2残。	体部下半まで薄い灰緑色を帯びた透明釉。外底部はヘラケズリにより露胎。	白灰色を呈し、黒色粒と気泡を僅かに含む。緻密である。	良好	内外一灰緑色 露体部一灰褐色	I-1b類
109	SE-1	同安窯系青磁	碗	—	—	1.7+α	口縁部片。	残存部全体に薄い青緑色を帯びる透明釉。	灰色を呈し、黒色粒を少し含む。緻密である。	良好	内外一淡青緑色	I類
110	SE-1	常滑	大甕	(36.8)	—	17.6+α	口縁～肩部上部片。ヘラ記号有り。	内面口縁部及び、外面横ナデ。内面肩部より横方向ナデ。	1mm程の黒色砂粒を多く含む。やや粗い。	良好	内一暗赤褐色 外一暗赤色 芯一明灰色	外面に自然釉
111	SE-1	常滑	大甕	—	—	11.3+α	肩部屈曲部破片。	内面屈曲部横ナデ。外面及び内面体部上部風化のため調整不明。	1mm程の黒色砂粒を多く含む。やや粗い。	良好	内一暗茶褐色 外一暗赤褐色 芯一明灰色	復元肩径58.8cm
112	SE-1	常滑	大甕	—	(17.6)	7.3+α	底部一体部下部破片。	内面体部下部ナデ及びカキ目。内面底部ナデ。外面体部下部工具によるナデ。外面底部焼成時の影響で調整不明。	1mm程の黒色砂粒を多く含む。やや粗い。	良好	内一暗赤色 外一暗茶褐色 芯一明灰色	底部に付着物 (うるし?)有り
113	SE-1	木製品	不明	—	—	厚さ0.4	厚さ4mmの板材。材は針葉樹と思われる。	両側には組み合わせのためのホゾがあり、上部の小口には接合のための目釘の穴が1つある。	—	—	—	一部に付着物 (うるし?)有り
114	SE-1	木製品	臼	—	—	—	臼の底に割れた1/3程の破片。材は広葉樹と思われる。	割れ口は焼かれて、炭化している。	—	—	—	—
115	SE-1	木製品	杵	—	—	—	小さな杵	先端を大まかに削り先端を尖らせる。	—	—	—	—
116	SE-1	木製品	杵	—	—	—	大きな杵	先端の加工痕は確認できない。表面は焼かれて炭化している。	—	—	—	—
117	SD-3	土師器	坏	—	(6.2)	—	底部1/2残存。	磨耗により調整不明。底部切り離しは回転系切り。	1mm以下の白色粒を多く含む。緻密である。	良好	内外一橙褐色 内一部灰褐色	—
118	SD-3	土師器	坏	—	(6.7)	—	底部のみ。歪んでいる。	磨耗により調整不明。底部切り離しは回転系切り。	微細な白色粒・雲母を多く含む。やや粗い。	良好	内外一黄褐色	—
119	SD-3	瓦質土器	火鉢	—	—	—	口縁部破片。口縁部下に2本の凸帯があり、その間にスタンプがある。	外面はケズリ後ナデ。内面はナデ。	2～3mmの黒色粒を僅かに、1mm以下の白色砂粒を多く含む。粗い。	良好	内外一淡黒灰色	—

表 陵巖寺馬場竝遺跡 2 次調査遺物観察表 8

遺物 NO	遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態特徴	手法特徴	胎土	焼成	色調	備考
120	SD-6	土師器	杯	—	(6.2)	—	底部1/2残存。底部は厚い。	内面は回転ナデ、内底ナデあり。底部切り離しは回転糸切り。	1mm以下の黒色・茶色粒を多く含む。やや粗い。	良好	内外一様褐色	—
121	SD-6	土師器	皿	—	—	—	1/5残存。内底は強いナデにより凹みがある。	内外面は回転ナデ。底部切り離しは回転糸切り。	1mm程度の白色砂粒・茶色粒を多く含む。粗い。	良好	内外一様褐色	—
122	SD-6	瓦器	椀	—	(7.0)	—	底部1/2残存。	磨耗により調整不明。	微細な褐色粒を多く含む。やや粗い。	やや不良	内外一様黄色 芯一淡黒色	—
123	SD-6	瓦器	小杯	—	—	—	口縁部から底部小破片。口縁部部を丸くし。器壁を厚くする。	内外面ともミダナ。底部切り離しは回転糸切り。	微細な砂粒を僅かに含む。緻密である。	良好	内外一様灰色	—
124	SD-10	土師器	杯	—	—	—	口縁部小破片。	内外面とも回転ナデ	微細な砂粒・雲母を少し含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
125	SD-15	土師器	小皿	—	—	—	口縁部から底部小破片。	内外面は回転ナデ。底部切り離しは不明。	微細な白色粒を僅かに含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
126	SX-10	土師器	杯	(11.0)	—	—	口縁部から底部中央1/4残存。底部はひらき。口縁部付近で上方に曲がる。	内外面とも回転ナデ。	1mm以下の白色粒と微細雲母を多く含む。粗い。	良好	内外一様褐色	—
127	SX-10	土師器	杯	—	—	—	口縁部小破片。	内外面とも回転ナデ。	微細な黒色粒を少し含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
128	SX-10	土師器	杯	—	—	—	底部から底部の小破片。	内外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の黒色粒を少し含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
129	SX-10	瓦器	椀	—	(6.2)	—	底部1/2残存。外面に一部スガが付着する。	磨耗により調整不明。	1mm以下の褐色粒を少し含む。緻密である。	良	外一白灰色 内一淡灰色	—
130	SX-10	瓦器	椀	—	—	—	底部1/5残存。底部外面に格子状の模刻がある。	磨耗により調整不明。	1mm以下の褐色粒を少し含む。緻密である。	良	内外一様灰色	—
131	SX-10	白磁	椀	—	(6.5)	—	底部1/4残存。高台は高い傾り出しである。底部外面には磨目がある。	軸は白色を帯びた半透明釉で、高台外面まで施される。	微細な黒色粒を多く含む。やや粗い。	良好	内外一様白褐色	白磁Ⅴ型
132	SX-10	白磁	椀	—	—	—	底部小破片。	軸は青灰色を帯びた透明釉で、内面と外面上半に施される。	微細な黒色粒を含む。緻密である。	良好	内外一様灰白色 露胎一白灰色	—
133	SX-15	土師器	小皿	7.0	5.4	0.9	口縁から底部片。	内外面回転ナデ。内底第一面不定方向ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の黒色砂粒。微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外一様褐色	—
134	SX-15	土師器	—	(10.9)	6.2	2.65	口縁から底部片。	内外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の白色・黒色砂粒。微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外一様黄褐色	—
135	SX-15	土師器	小皿	—	—	1.9	口縁部から底部1/5残存。	内外面とも回転ナデ。底部切り離しは回転糸切り。	1mm以下の白色粒と微細雲母を多く含む。粗い。	良好	内外一様褐色	—
136	SX-15	瓦器	椀	—	—	—	口縁部から底部下半1/6残存。口縁部部はやや丸く。器壁は全体に厚い。	外面は回転ナデ。内面はミダナだが明確な痕跡は口縁部付近だけである。	1mm以下の砂粒を含む。緻密である。	良好	内外一様灰色～淡灰色(口縁部付近)	—



表 陵巖寺馬場笠遺跡 2 次調査遺物観察表 9

遺物 NO	通稱	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態特徴	手法特徴	胎土	焼成	色澤	備考
137	SX-15	瓦器	碗	—	—	—	口縁部から体部中位1/5残存。	内外面ともミガキ。	1mm以下の砂粒を含む。緻密である。	良好	外—黒灰色 内—濃灰色	—
138	SX-15	瓦器	碗	—	(7.5)	—	底部1/2残存。底部外面にX字状の線刻がある。	内外面とも回転ナデ。	1mm以下の砂粒を含む。緻密である。	良好	内外—淡灰色	—
139	SX-15	瓦器	碗	—	—	—	口縁部から体部下1/5残存。口縁部は不定に削られている。器壁は全体に厚い。	内外面ともミガキ。外面体部中位以上はいぶしが顕著である。	砂粒等の混入はなく緻密である。	良好	外—黒灰色～灰色 内—灰色	—
140	SX-15	瓦器	—	—	—	—	口縁部から体部下1/5残存。	内外面ともミガキ。	1mm以下の砂粒を含む。緻密である。	良好	内外—濃灰色	—
141	SX-15	須恵質土器	すり鉢	—	—	—	口縁部小破片。	内外面とも回転ナデ。	1mm以下の砂粒を含む。緻密である。	良好	内外—灰色	—
142	埴地層	土師器	埴	10.8	7.1	2.8	口縁を一部欠く。全体的に作りが粗く、切り離し時に歪んでいる。	内外面回転ナデ。内面底部不定方向ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒を多く含む。不純物が少し目立つ。	良好	内外面—明茶褐色	—
143	埴地層	土師器	小皿	(12.6)	(6.2)	2.5	口縁部片。	内外面回転ナデ。内底部一部不定方向ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の白色砂粒。微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外—暗褐色	—
144	埴地層	土師器	埴	(12.1)	(7.8)	3.9	底部から体部1/3残存。体部はやや急に立ち上がる。	内外面回転ナデ。内底は磨耗により調整不明。切り離しは回転糸切り。	微細な白色粒・雲母を少し含む。緻密である。	良好	内外—淡褐色	—
145	埴地層	土師器	埴	12.6	6.0	2.6	口縁部～底部片。口縁を一部欠く。	内外面回転ナデ。外底部回転糸切り。	1mm以下の赤色砂粒。微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外面—明赤褐色	—
146	埴地層	瓦質土器	碗	—	6.2	—	底部～体部下半の破片。体部はやや丸味を持ち外上方にのびる。	磨耗により調整不明。切り離しは回転糸切り。	1mm以下の白色・黒色粉を少し含む。やや粗い。	やや不良	内—黄灰色 外—淡灰色	—
147	埴地層	瓦質土器	火鉢	—	—	—	口縁部片。内側のスタンプが並列してある。	内外面ナデ。	1mm以下の白色砂粒を多く含む。緻密である。	良	内面—黄褐色 外面—黒灰色	—
148	埴地層	土師質土器	片口鉢	(24.8)	—	3.9+α	口縁部片。	内面不定方向ハケ目。外面風化により調整不明。	1mm以下の白色・黒色砂粒を含む。緻密である。	良好	内面—淡黄褐色 外面—黒褐色	—
149	埴地層	土師質土器	すり鉢	(24.4)	—	6.8+α	口縁部破片。口縁端部内面を内側へ折り返す。	外面は回転ナデ。内面は大きな盛り目が縦方向。細かな盛り目が斜めに施される。	1mm以下の白色・黒色粉を含む。やや粗い。	良好	外—淡黄褐色 内—黒褐色	—
150	埴地層	白磁	碗	17.1	(5.0)	7.1	若干の欠損はあるがほぼ完形。多少ひずんでいる。	高台の一部を除く内外面に青色を帯びた透明釉。外底部は回転ヘラケズリにより露胎。	青灰色を呈し気泡を多く含む。緻密である。	良好	内外面—淡青緑色	—
151	埴地層	肥前陶磁器	浅形碗	(13.0)	4.6	3.5	口縁部～体部2/3欠損。体部はひらいてのびる。	軸は灰白色を帯びる半透明で、内面及び高台外面まで施され、見込みは蛇の目状に掻き取る。	黄褐色を呈し1mm以下の黒色粒を多く含む。	良好	内外面—灰白色 縁部—青灰色	—
152	埴地層	石器	石鏃	—	—	—	完形。	端部全面に加工痕。	—	—	全面—黒色	蝦島産
153	埴地層	砂岩?	砥石	—	—	—	木口以外全面使用されている。	—	—	—	凸面—暗灰色 凹面—暗茶褐色	—

表 陵厳寺馬場笠遺跡 2 次調査遺物観察表10

遺物 NO	遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態特徴	手法特徴	胎土	焼成	色調	備考
154	整地層	石製品	石鐮	—	—	—	口縁部小破片。外面全体にスス付着。	内面不定方向ケズリ。外面一部に整形痕。	微細な石英を多く含む。緻密である。	良好	内面—灰色 外面—黒色	—
155	表層	土師器	杯	8.2	4.3	1.8	口縁部一底部片。口縁の一部に油煙。	内外面回転ナデ。内面底部不定方向ナデ。外面底部回転糸切りのち板状圧痕。	1mm以下の白色・黒色砂粒。微量の雲母を含む。緻密である。	良好	内外面—明茶褐色	—
156	表層	土師器	杯	(8.2)	(6.3)	3.8	全体の1/3残存。体部は丸味を帯び口縁部はやや内凹する。	内外面回転ナデ。外底部回転糸切り。内底ナデあり。	1mm以下の白色・黒色粒を僅かに含む。緻密である。	良好	内外面—淡褐色	観入品か
157	表層	須恵器	盃	—	—	—	口縁部小破片。	内外面ナデ。内面一部に不定方向ナデ。	1mm以下の白色・黒色砂粒を含む。緻密である。	良	内面—淡灰色 外面—淡黒灰色	—
158	表層	土師器	杯	—	—	2.2+α	口縁部小破片。残存部下端に穿孔が2つある。	内外面回転ナデ。穿孔は焼成前に施される。	微細な砂粒・雲母を含む。緻密である。	良好	内外—淡褐色	—
159	表層	瓦質土器	炊餅	—	—	6.8+α	火鉢や風呂の脚部でつま先部分を欠損。	ヘラ削りにより整形し、ナデで仕上げる。	1mm以下の黒色粒・雲母を含む。緻密である。	良好	内外—灰色 芯—黒灰色	—
160	表層	白磁	碗	—	(7.2)	—	底部から体部上半1/5残存。回転ヘラケズリによる整形。	釉は青味を帯びる透明で、内面及び体部下平まで施される。	1mm以下の黒色粒や気泡を多く含む。やや粗い。	良好	内外—淡灰緑色 露胎部—白灰色	Ⅳ類
161	表層	龍泉窯系青磁	碗	—	5.3	2.65+α	底部片。内面底部に草花文スタンプがある。	緑灰色を帯びた透明釉が、外面底部を除く全面に施されている。外面底部回転ヘラケズリ。	灰色を呈し。微細な砂粒を僅かに含む。緻密である。	良好	内外—緑灰色 露胎部—灰色	—
162	表層	肥前系陶磁器	徳くり	(1.7)	—	—	頸部のみ残存。	釉は呉須で瑠璃草を掻いた上に薄い青味を帯びた透明釉を施す。内面には頸部引き上げの螺旋状のヘラ痕が残る。	淡灰色を呈し。不純物を含まず緻密である。	良好	外—淡白青色・青灰色 内—淡白黄色	—
163	表層	粉引唐津	山茶碗	—	4.8	—	体部上半を欠損。体部はやや急に立ち上がりのびる。	釉は白黄色を呈す半透明釉を全面に施し、登付けの部分のみ掻き取る見込みには砂目跡が5つ確認できる。	微細な白色粒を含む。緻密である。	良好	内外—白灰色 芯—淡灰色	—
164	表層	褐釉陶器	碗	—	(4.5)	—	底部～体部下半1/2の破片。器壁は厚い。内底にはスラグ状のものが堆積しその上に釉が掛かる。	釉は黒緑色を呈し。粘りが強い。	微細な砂粒・黒色粒を含む。やや粗い。気泡を多く含む。	良好	内外—黒緑色 芯—灰色—淡灰色	—
165	表層	石器	磨製石斧	—	—	11+α	上部を欠損。柱状船刃石斧。蛇紋岩製。	側面には擦痕と敲打が確認できる。	—	—	淡灰色	—
166	表層	石製品	ふた	—	—	—	滑石製のふたつまみ部。	内面風化のため調整不明。一部にケズリ痕か？外面ケズリ痕。	—	—	内面—暗灰色 外面—黒褐色	—
167	表層	石製品	砥石	—	—	5.8+α	粘板岩製。	—	—	—	表—淡赤黄色 裏—淡灰白色	—



# 図 版

図版 1



第Ⅰ次遺構面東半全景



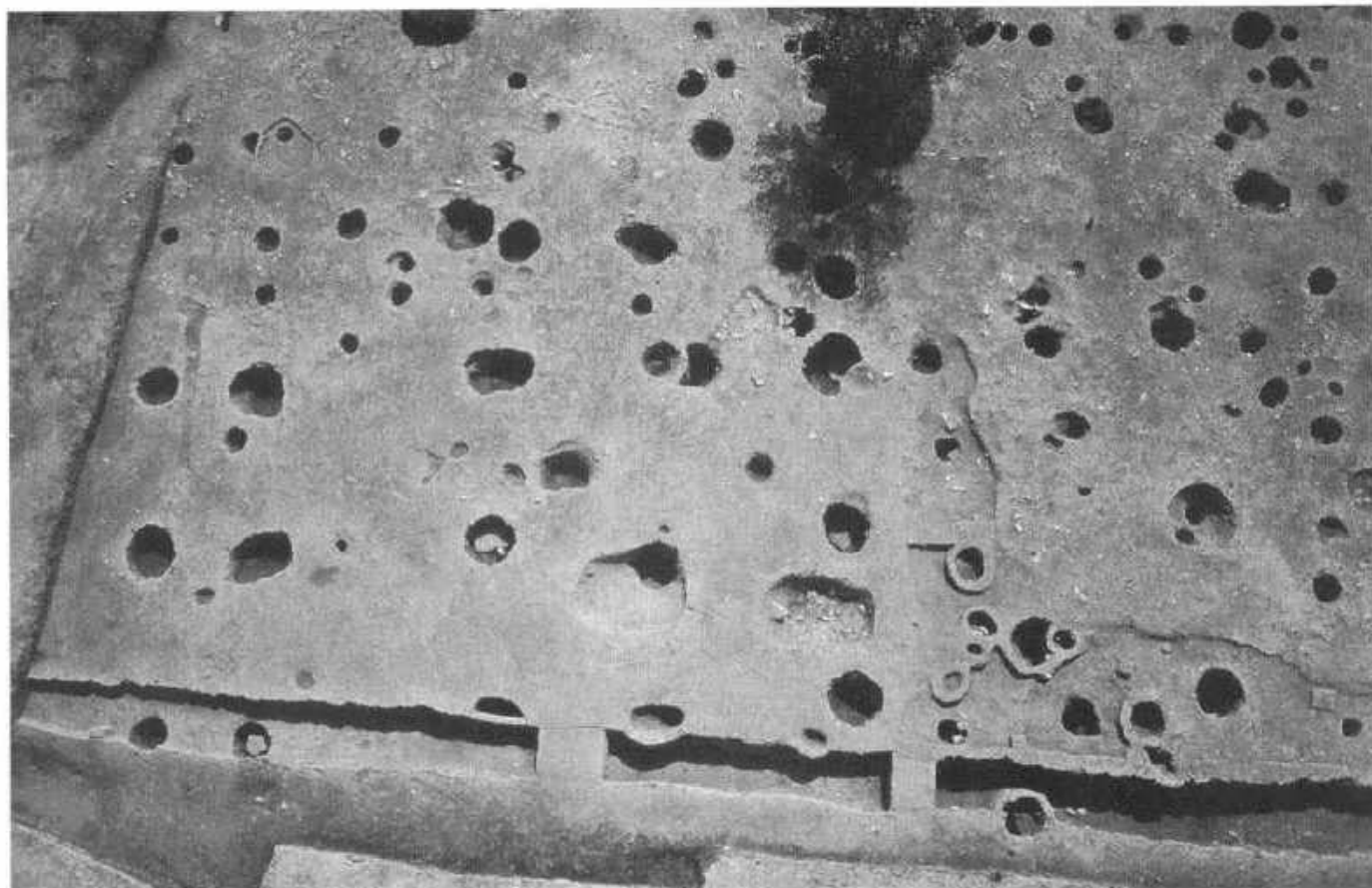
第Ⅰ次遺構面西半全景



第Ⅱ次遺構面東半全景



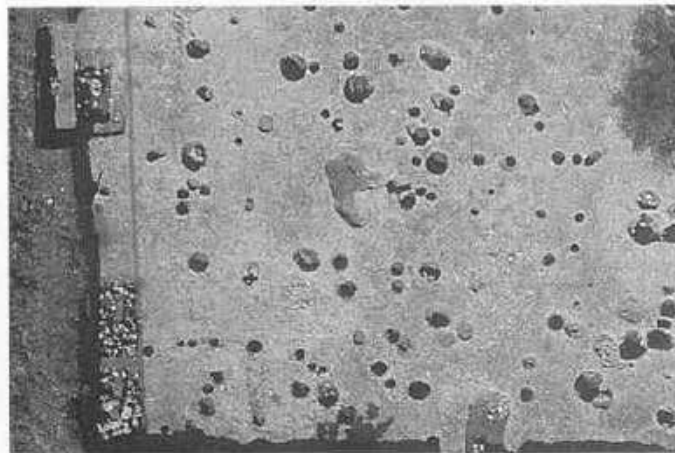
第Ⅱ次遺構面西半全景



SB1-1 · SB1-2



SA1 · SD6



SB2



SK1



SK2





SK 3



SK 4



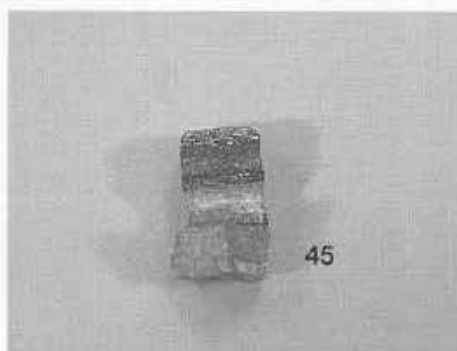
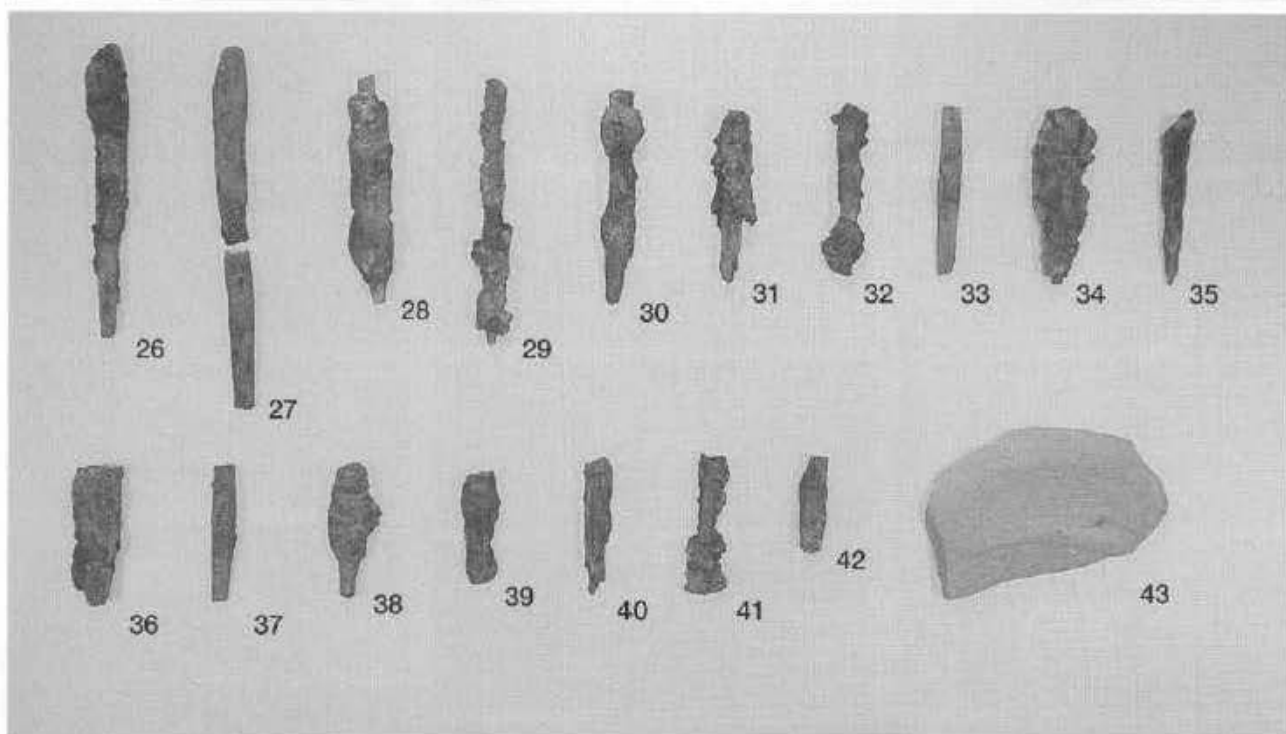
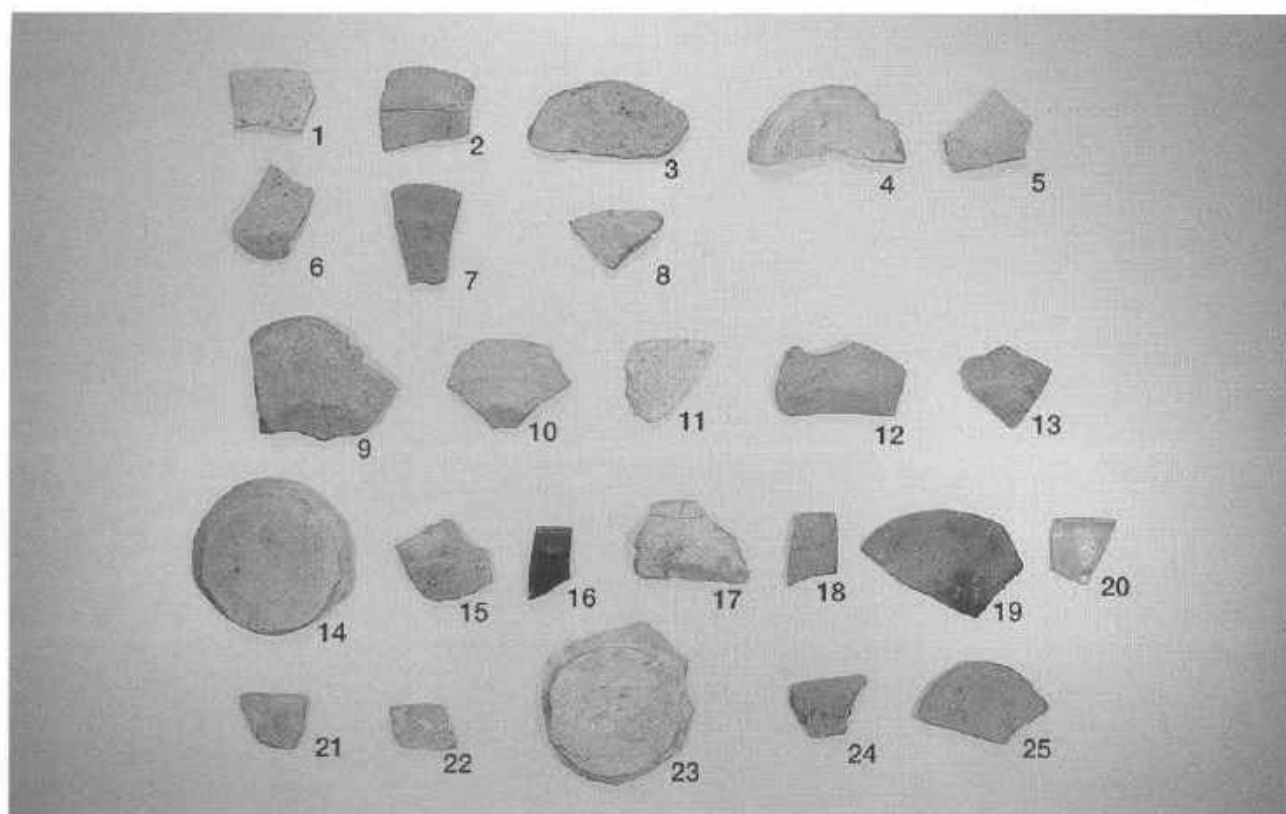
SK 10



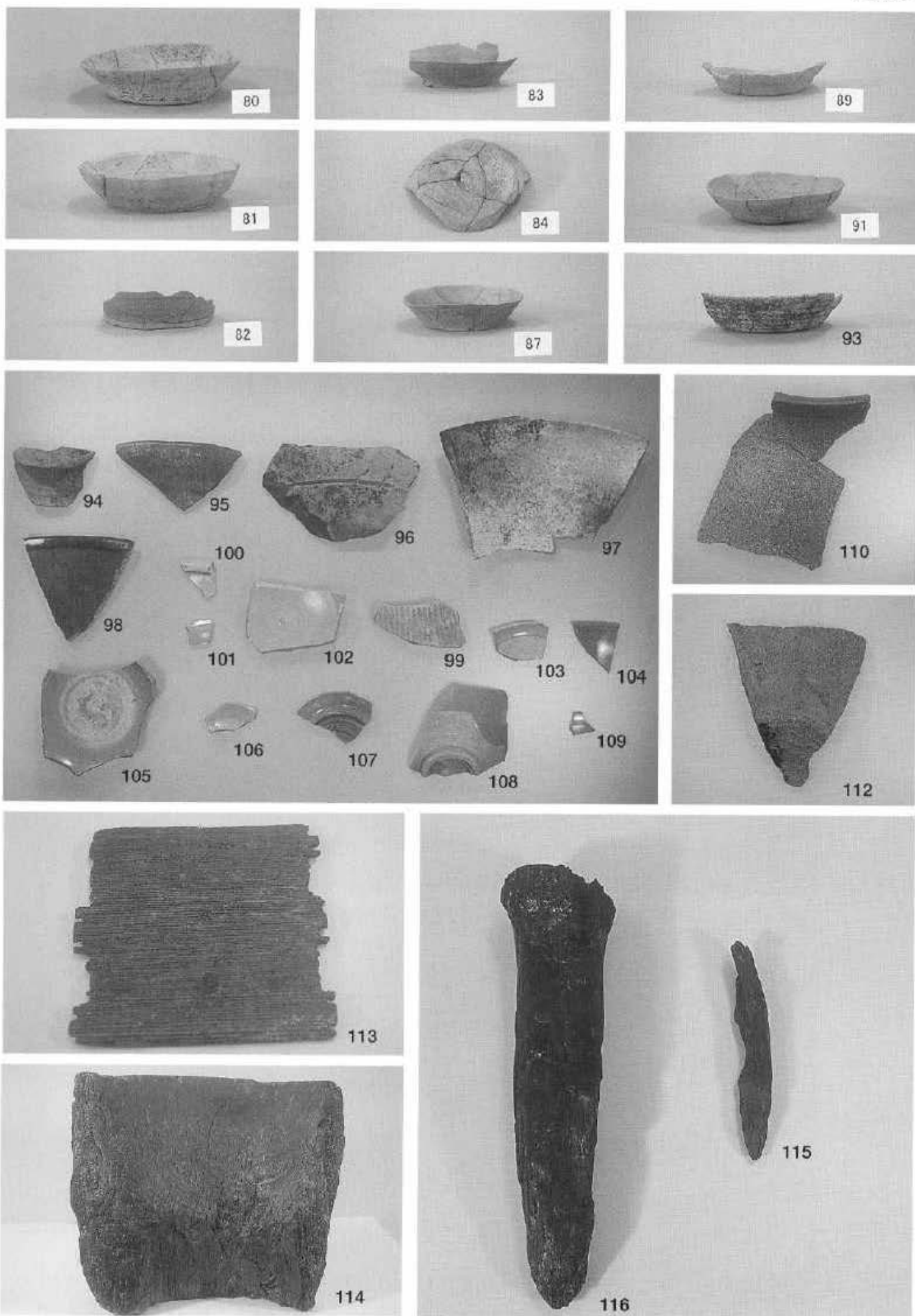
SE 1



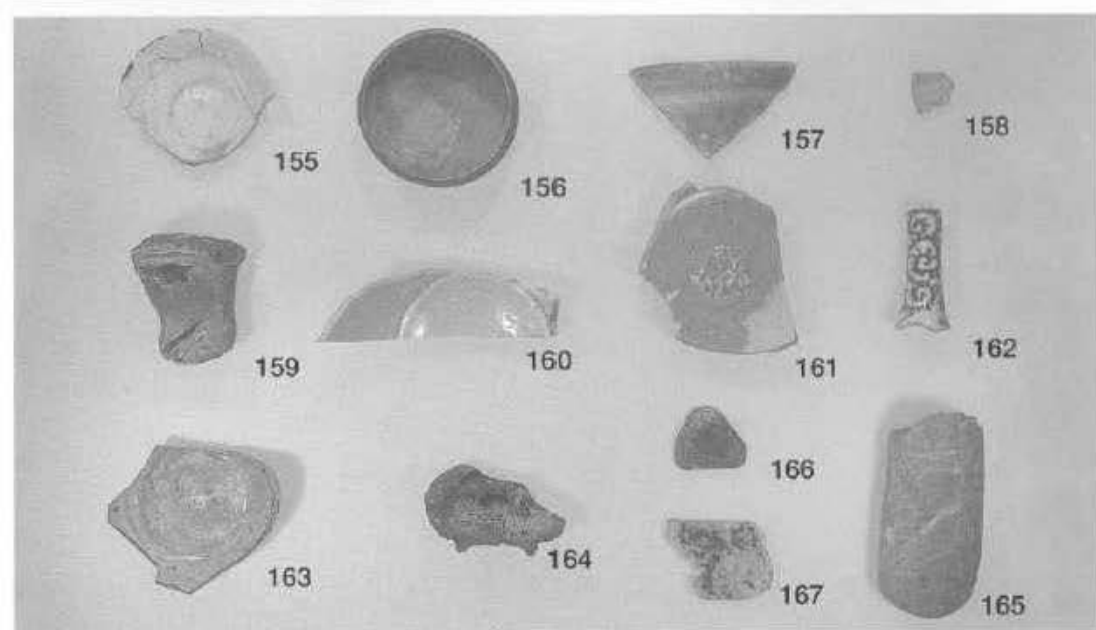
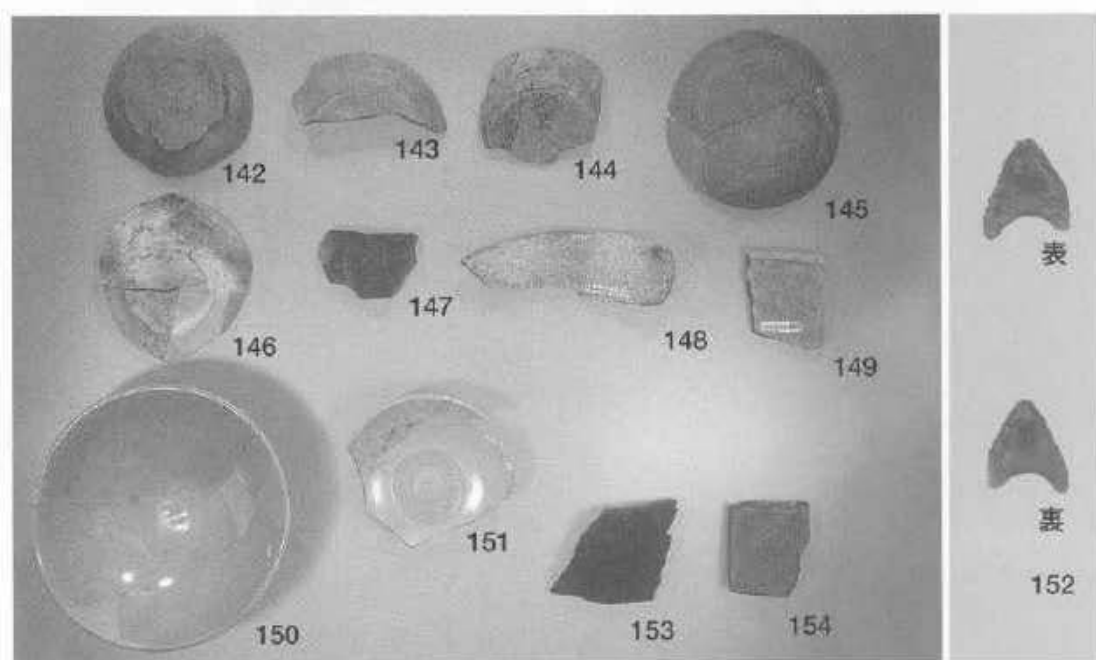
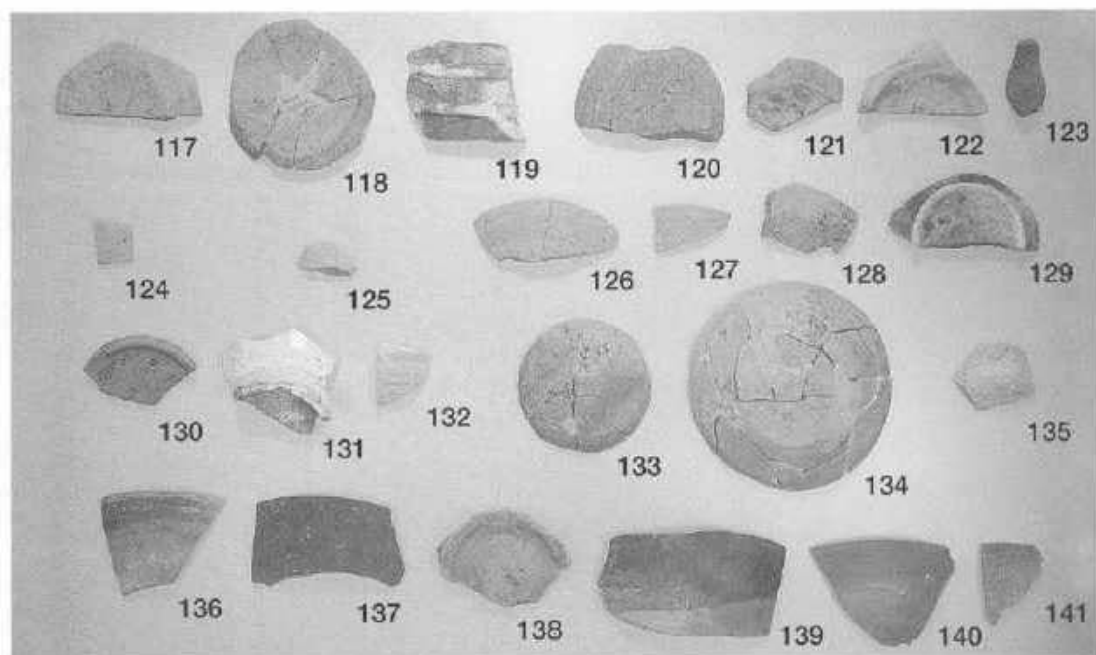
SA 2・3・SB 3













## 報告書抄録

フリガナ	リョウゲンジババカサイセキニジチョウサ							
書名	陵巖寺馬場笠遺跡2次調査							
副書名	福岡県宗像市陵巖寺所在遺跡の発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	宗像市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第60集							
編著者名	坂本雄介							
編集機関	宗像市教育委員会							
所在地	〒811-3492 福岡県宗像市東郷一丁目1番1号 TEL(0940)36-1540							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°、′、″	°、′、″		m <sup>2</sup>	
リョウゲンジババカサ 陵巖寺馬場笠 遺跡	ムナカタシリョウゲンジ 宗像市陵巖寺 706-6番地	40220	330777	33° 48′ 26″	130° 35′ 21″	2006年6月1日～ 2006年9月31日 (現地調査)	約716.57 m <sup>2</sup>	個人住宅 建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
陵巖寺馬場笠 遺跡	集落	中世 近世	掘立柱建物 柵列 土壇 溝 井戸		土師器 瓦質土器 国産陶器 輸入陶磁器			

### 陵巖寺馬場笠

宗像市文化財調査報告書 第60集

平成20年3月31日

発行 宗像市教育委員会

福岡県宗像市東郷一丁目1番1号

印刷 千年書房株式会社

福岡市博多区東那珂3丁目6番62号

ISBN978-4-924308-70-1 C0021





